

小田原史談

第 183 号

発行所 小田原史談会
小田原市栄町2-13-20
アオキ画廊内TEL (24) 0637

酒匂川河口の空中写真をみて

写真は、「岩波写真文庫156・神奈川県」の中から採りました。奥付をみると、「一九五五年第一刷発行」となっていました。すると、この数年前昭和二十八年前後に撮影したように思われます。

写真の中に「酒匂川の河口・東海道(線)の鉄橋」とあるので、上部に見える白い横線①は、海岸線です。したがって酒匂川右岸は、当時呼称した網一色・今井・井細田・多古の各地区の一端の展望となります。左岸は、酒匂・中新田・下新田の各地区の眺望となります。

これらの地には、酒匂川の営みと人の営みとの共生が刻まれています。(ここでいう酒匂川の営みは、表流水や伏流水、堆積作用による砂や砂利といった機能面のことです) 写真を通して、共生を見つめ、地域理解に近づいてゆきたいと思えます。

一 川の恵みの利用

1. 湯浅工場を例にして

写真下部の建物群②は、湯浅電池

小田原工場です。創業は昭和十六年十一月で、太平洋戦争が始まる直前の操業開始でした。潜水艦用の大型蓄電池を製造するために、五万七百余坪という広大な土地を買収して、工場を建設したといえます。

写真は、湯浅工場の酒匂川に寄り添う景観をとらえて、工場の立地性を見事に写しております。

①工業用水がとり易い

湯浅工場では、電池の製造過程で、大量の水を使うとのこと。電解液に使う水、充電温度を下げる冷却水、従業員の清潔に使う水といった具合です。

敷地内の深い井戸(五基)から、伏流水をポンプで汲みあげて使っています。この使用量は、一日約五千立方メートル(ドラム缶に換算



酒匂川の河口、東海道の鉄橋

伊賀上野方面
史跡めぐりと案内

38 ページをご覧ください

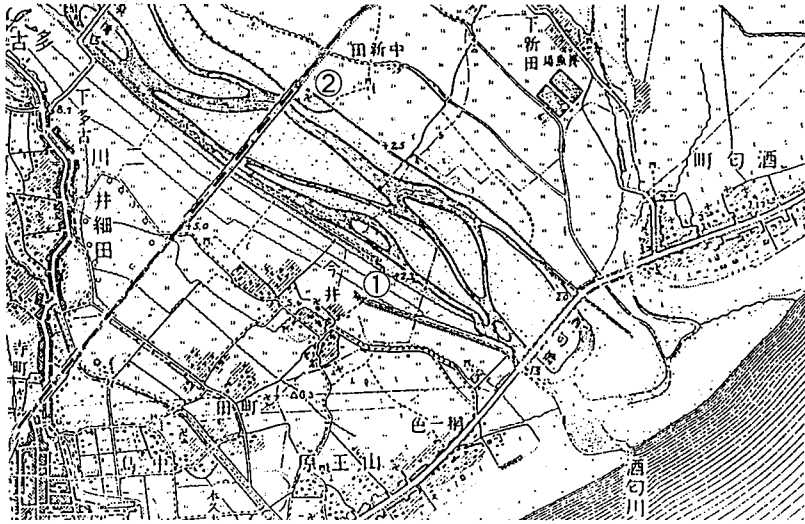


図1 昭和29年発行の地形図より

して約一万本」といいます。
 大量の水需要に対応できて、しかも近隣社会の地下水入手に悪影響は与えません。川ぞいに立地した工場の利点が見えてきます。工場の基礎体力を増強する水を、酒匂川からいただいています。

②工場づくりに砂利を使う

工場建設期(昭和十五〜十六年)頃は、申請が通れば河川の砂利を採取できた時代でした。
 買収地は、隣りの河原までトロッ

コ線を設けて、砂利を敷地に運び入れ、土地造成や建築に使ったということです。

地の利を活かして、酒匂川から砂利をいただき、工場づくりに役立った湯浅工場でした。

③工場敷地の買収問題

写真は、川ぞいの水田地帯に進出した、広大な湯浅工場をみせております(約五万坪)。この地は、多数の地権者がいたことを含み、買収問題を秘めていました。

これを知ったのは、小田原商工会議所発行の『小田原地方商工業史』の記事からです。
 「昭和十四年六月、三

井系の蓄電池工場が、関係地主六十五名の土地五万坪を、反当たり一一五〇円で買収。しかし七月に、反当たり一二〇〇円となる。(会社は一一九〇円、村が一〇円負担。村の負担総額約五十万円)」

酒匂川の営みもたらした広大な平地を、工場敷地にいたたく過程に、村役場の犠牲を含む、仲介の働きかけがあったということだ

④軍部の潜水艦接岸構想の噂

潜水艦を工場脇まで通して、蓄電池を供給するという、合理化案があった旨の噂がありました。それがための酒匂川ぞいの立地で、酒匂川を潜水艦接岸に利用しようということでした。

この構想はやがて断念されて、製品は横須賀まで運んだといえます。幻の潜水艦接岸の工場で、実現しな

くてよかつたと思えます。
 工場が川ぞいに立地した真因に、思いをよせる構想で、酒匂川の流れをうまくいただこうとした構想でした。

2. 穴部堰
 以上のように、酒匂川の営みもたらした恵みを、とりこみいただいた、活用してきた湯浅工場でした。

写真の工場の上部に見える横線は、穴部堰の分水路です。穴部堰は、東海道線の海側の水田にも、別の分水路によって使われています。

穴部堰の規模は、『多古の郷土誌(野頼徳治編)』が詳しいです。この中に「穴部用水負担金の基準反別割表・昭和初年」がありました。

これによって写真にみえる右岸の水田面積は、次のように推測しました。網一色・今井をあわせて約二十六町歩・井細田・多古の写る酒匂川寄りの水田を加えて、三十余町歩の水田と仮定しました。

この水田を潤している穴部堰は、狩川から取水しています。開発当初の穴部村の地からが、川の流れの変化で、上流の飯田岡村の地が変わったといえます。

この流路筋の水田、すなわち酒匂川下流の右岸の水田は、狩川の水をいただいていることになりました。つまり、箱根山地が造成した水となります。

左岸の水田は、酒匂川の水をいただいています。これは、富士山地や丹沢山地からの水となります。

水の生育歴の違いを、振り分けている酒匂川の位置にみえます。写真は、この情景も写しとっています。

二 控え土手

写真の右岸河口に、黒い斜線⑤がみられます。これが、酒匂川特有の控え土手です。(図1①)この背後の

字名	基準反別	字名	基準反別
清水新田	三町八反歩	町田	十五町三反歩
穴部	三町五反	今井	二十町
穴部新田	八町一反	中島	二町
多古	十七町三反	山王	九町八反
井細田	七町	網一色	五町八反
池上	五町三反		

表1 穴部用水基準反別割表

集合体は、網一色の神社の森や、海岸沿いの松林のようです。この地に、網一色集落が開かれています。この地は、酒

匂川を渡る右岸の出入口になっています。酒匂川に橋がなかった江戸時代は、右岸の川越え拠点として機能し、東海道の大切な場所でした。

酒匂川は急流型河川で、洪水の大災害の歴史をもつ川として有名です。河口という地形は、酒匂川の洪水の他に、高潮の影響(川の溢流や逆流)による被害も起りがちです。この水害予防に、構築された控え土手と考えられます。

写真は、網一色や山王原集落と水田を守り、東海道の交通安全を担っている控え土手の背景をとらえて立派です。また、左岸の堤防のずれ(図1②図2)も視野に入れて有益です。

これらは共に酒匂川の激流を分散させて、水の集中力を弱め、水勢を殺してきた、先人の知恵の遺産です。

三 今井飛地

写真の左岸の堤防ぞいに、白く見える建物群⑤は、柳屋ポマード本舗小田原工場(昭和三十年竣工)です。建設中を写したようです。この背後の黒い集合体は、神明社の森です。(現かもめ図書館南方にある神社の森)

この神明社⑤の手前に今井飛地があり、柳屋工場は飛地を敷地(図2④)にくみいれて建設されました。つまり、この辺が今井飛地といわれる所です。(図2参照)

右岸にある「今井」が、どうして左岸の地に飛地があるのか? 解明の話は聞いていません。酒匂川流路変

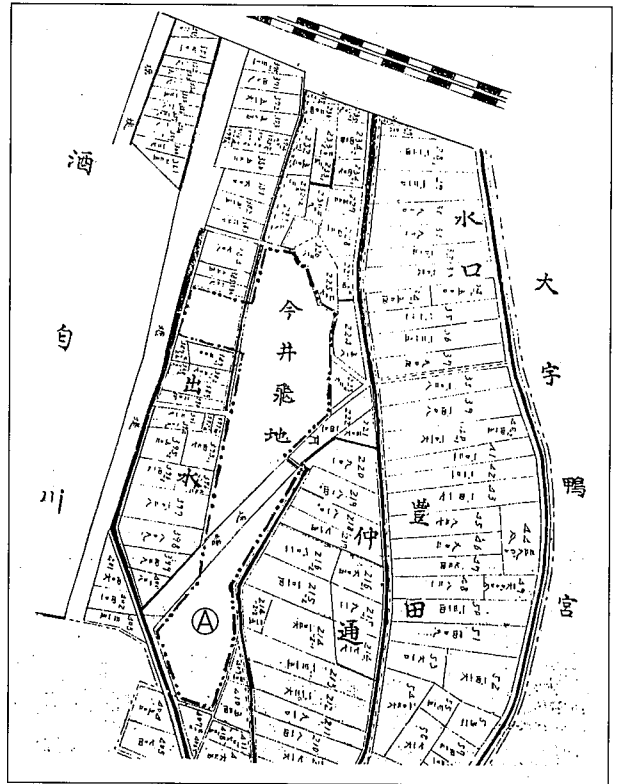


図2 昭和7年発行の地図より

遷説や先人開拓説など、様々な見方がいわれています。

これに七夕信仰説を加えます。酒匂川を天の川、右岸の本村を牽牛星、左岸の飛地を織女星に見たてて、天の神に五穀豊穡を祈ったという見方です。浪漫的でなく、壮大にして敬虔な祈りの所産とみなします。思いが膨れる今井飛地でした。

地元(中新田)に、飛地にかかる長老からの話が残っていました。

神明社は今井の氏神さんだったと聞かされてきた。

川(酒匂川)の流れが変わってしまったので、今井の人が氏神さん(現在地に)置いていった。

神明社は、今井の本光寺についていたお宮さんだったらしい。

下府中村 (足柄下)
下堀村
中里村
矢作村
※ 鴨宮村
上新田村
中新田村
下新田村
今井飛地
酒匂飛地

表2 市町村一覧より

神明社の参道は、本光寺方向に向いていた。(昔の本光寺の位置)

これに対して本光寺住職は、「寺に今井飛地のいい伝えはない」返事でした。今井の長老は「飛地は明治の頃、下府中に寄付したらしい」といっていました。

明治二十二年発行の『新旧対照市町村一覧』(東京和泉橋警察署編)の中

に、「今井飛地」(表2)があり、編入時を知る資料となりました。

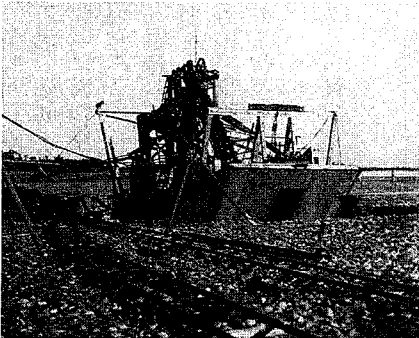
四 砂利採取販売

写真の左岸鉄橋際に、白く見えるのが、酒匂川砂利有限公司社と(株)ピーエス小田原工場です。

酒匂川砂利有限公司の事務所に①、旧国鉄からの感謝状(昭和四十五年)が掲示されています。この中に「大正八年熱海線建設以来今日まで五十有余年にわたり……道床用バラスト(砂利)に尽力され……」とあって、この功績を称えていました。すなわち、鉄道線路用や橋桁用などに使う砂利の供給業者の一面を知らせていました。

当時に鴨宮駅からの引込線があった、十輛〜十五輛編成の貨車が、午前一回、午後一回来て、線路用などの砂利を運搬したといえます。

砂利採取船で採った砂利は、トロッコ(運搬用箱車をレール上にのせて運ぶ運送車)に積んで、引込線の貨車



砂利採取船とトロッコ線

まで運びます。この積み変えるのに、人力でやっていった時代があったという事です。大勢の人が元氣よく働き、活気十分の仕事場でした。

砂利や砂は鉄道関係の他に一般用に、道路やトンネル、橋など、各種の工事にも供給していたとのことです。

小田原の郷土史再発見

酒匂川徒歩渡の終焉

石井啓文

酒匂川徒歩渡かちわたしの始まりについては、本誌一七八号(平成十一年七月)で、寛文元年(二六二)には確認でき、寛永十二年(二六五)の参勤交代制発令の頃には始められたのではないかと推定した。そして、この制度も江戸幕府の崩壊と共に、終焉を迎えるのであるが、これまでその年月は明確には論じられていない。現在、酒匂川東岸の酒匂橋より少し上手にある石碑に、「明治維新(一八六八)に廃止された」とあるのは間違いであることは既に述べてきた。今回、これを決定付ける史料が見られたので紹介する。

明治になって、日本で発行された「ザ・ファー・イースト」という外

と変わりました。

川採取時代は、まさしく酒匂川からいただいた砂利や砂で、恩恵の享受業者という感じです。天恵を社会に調達する営みに、母なる酒匂川の象徴と共生を思いました。

五、河口の流木

酒匂川的作用に、流木がみられます。川幅一杯に流れる大水の時は、流木が付き物です。これが河口の沿岸に漂着します。格好の薪材となつ

て、沿岸住民への燃料資源提供が展開されました。

明治十八年の中新田村懇願書の中に見える「本村向嶋二積有流木鴨宮八名二持去候」という状態で、燃料資源渴望の住民行動と理解しました。

流木の今は公害的ですが、薪が燃料の必需品だった時代は、渴望の流木出現でした。沿岸住民の燃料生活を援助した酒匂川ともいえます。

国新聞がある。これに掲載された次に示す紀行文は、結果的に徒歩渡の終焉となる二ヶ月前の、明治四年七月に川越した匿名のイギリス人が書いたものである。「富士甲信紀行」と題され、英人三人が輦台で、従者は肩車での川越である。

『酒匂川は、ふつうは小田原川と呼ばれているが、ここに着くと、私たちは馬からおり、四人の男が頭上にささげた蓮台に乗せられたが、この男たちは、川のある部分では胸までも水にひたつて、流れに逆らつて進むのに苦労した。馬たちは人につれて川を横切った。荷駄馬た

酒匂川にとつても、人間社会に、用水・砂利・流木等の役立ちは、きれいに流れる環境となつて、好ましい営みと考えます。

最後に、江藤常雄さん、田代吉之助さん、杉浦恵二さん、穂谷野昭作さん、下川茂三郎さん、藤尾栄さんのご指導と、岩波書店の写真掲載許可があり、このおかげの賜物であることを付記します。(石綿 勉)

で清潔であった。ここで私たちははじめて役人たちが互いにあいさつするのを見たが、何回も何回もおじぎをしたり、また頭を床におちつけたりするのを見て、たいへん驚いたのである。』

この文章で、明治四年(二七二)七月の時点でも徒歩渡が行われていたことを知らされる。次の写真は、同行が掲載されている『みかどの都』(桃源社刊)から引用した。投書された紀行文を見た新聞記者が、酒匂川に取材に来たことを記している。

対岸の森は、酒匂側から見た網一色の八幡神社付近であろうか。

明治維新後の酒匂川の徒歩渡について、『皇国地誌残稿』は酒匂川の項で、次のように記している。

『明治初年二至リ、漸次川瀬ノ定マレルニ因リテ、三坂橋ヲ架セリ。其ノ宮繕ノ如キハ、スベ



『みかどの都』より

酒匂川を越えて小田原へ(『みかどの都』より)

3人のイギリス人と従者たちが蓮台で渡ったあたり。わが特派カメラマンが着いた時はごらんの通り乾上っていた。

テ三ヶ村ノ民費ナレバ、行客一名ヨリ金五厘ニ車馬等之ニ準ズ一ノ橋料ヲ収ム、然ルニ仮橋モ尚不便ナルヲ計リ、三村ノ里民協議シ、各ノ民費ヲ以テ明治十四年ヨリ着手シ、同十五年二月、更ニ一橋ヲ竣成セリ、其長百九十八間(約三〇ミ)幅三間ノ木製ヲ架シテ、酒匂橋ト名ズケ、行客ヨリ一名ノ橋料金八厘ヲ収ム

この記述から、三方村(酒匂・網一色・山王原)の費用で仮橋が架けられ、徒歩渡が廃止されたことが知られるが、「明治初年」が何時であったかは判明しない。

次に示す文書は、京都府布令書第

一四号であるが、明治四年九月に、酒匂川の渡船と仮橋について大政官と大蔵省から通達が出され、駅通寮からの酒匂川船賃と、橋銭が記されている。

東海道相州酒匂川通路ノ儀当分別紙ノ通被相定候条此旨可相心得事
辛未九月 大政官

酒匂川渡船并仮橋当分左ノ通相定候条定賃銀ノ外酒代等乞請候儀無之様諸事地方官ニ於テ取締可致事

一 船賃并橋銭当月朔日ヨリ賃銀表ノ通相定候事

一行幸 行啓其余非常出兵等之節ハ別段ノ御処置可有之事

一年々三月ヨリ九月迄渡船十月ヨリ二月迄仮橋ノ積リ尤水ノ深浅ニ随ヒ渡船仮橋両様ノ内ヲ以テ通路可致事
一 並々ノ渡船ハ晚六ツ時ヨリ夕六ツ時迄ニ可限事
但急用ノ者ハ刻限ニ不拘
出船可致尤夕六ツ時ヨリ晚六ツ時迄ハ都テ定賃銀ハ五割増ノ事
一 賃銀ノ儀ハ昼夜ノ区別無之

右之通相定候事

辛未九月

大蔵省

酒匂川船賃

一 銭七拾弍文

人 老人

一 銭三百文

長棒駕籠 一挺

一 銭貳百弍拾四文

引戸駕籠 一挺

一 銭百四拾八文

垂山駕籠 一挺

一 銭三百七拾弍文

大長持 一棹

一 銭貳百弍拾四文

長持 一棹

一 銭百拾弍文

両掛一荷分持共

一 銭貳百弍拾四文

乗馬一疋口附共

同川橋銭

一 銭六拾四文

人 老人

一 銭貳百六拾四文

長棒駕籠 一挺

一 銭貳百文

引戸駕籠 一挺

一 銭百三拾弍文

垂山駕籠 一挺

一 銭三百三拾弍文

大長持 一棹

一 銭貳百文

長持 一棹

一 銭百文

両掛一荷分持共

一 銭貳百文

乗馬一疋口附共

右之通相定候事

辛未九月

駅通寮

橋銭一人銭六拾四文とあるから、前述の『皇国地誌』にある金五厘は、これより後年であることが知られる。ただ、渡船料金が定められているが、渡船の事実(史料)は、現時点では全く見られない。前記大蔵省の通達で、箇条書三項目に「十月ヨリ二月迄仮橋ノ積リ尤水ノ深浅ニ随ヒ渡船仮橋両様ノ内ヲ以テ通路可致事」とある。おそらく、翌明治五年夏は、この時の仮橋が取壊されず、その後も渡船が続けられたのではないだろうか。

いづれにしても江戸時代初期に始まった徒歩渡は、旅人の難儀は元より、川越役務を担当した酒匂・網一色・山王原三ヶ村民に過酷な労働を強いてきたが、明治四年九月三十日を以て終焉したことは確認できる。

なお、この京都府布令書第一四号が、『神奈川史談』第五号(昭和三十三年十二月発行)に掲載されていることは、西相模歴史研究会青木良一氏のご指導があったことをお知らせし、御礼申し上げます。



小田原城

石垣の刻印調査(一)

小野 薫

昭和二十五、六年の頃、山里に近い薪炭林は、国の補助のもとに、杉や檜の山にと、改植造林が急速に行われました。私の家も、これに応じて改植造林をしました。

ある夏の日、この時に植えた杉の木の下刈りをしました。昼下がりが、木陰の大

石に腰をおろそうとした時、そこに大きな腹が「とぐろ」をかいていて、びっくりしました。追い払った所に、三ツ葉柏の刻印が浮かびあがって、二度びっくりしました。

その後、この刻印を調べてみたら、なんと松平土佐守の紋でした。蛇に導かれ

た刻印のありかで、不思議な巡りあわせに啓示を思った次第です。

それ以後、私なりの小田原城の石垣の刻印調査が始まりました。天守閣や内堀等の石垣を、九倍率の双眼鏡も使って調べました。

気にして見つめると、目に入るものです。発見の度ごとに、位置を確認して、写真や拓本をとり、記録にとどめました。次々に発見する刻印に魅せられ、励まされて、風の日も、冬の凍てつく日、夏の汗にも堪え

て、一人で挑戦しました。

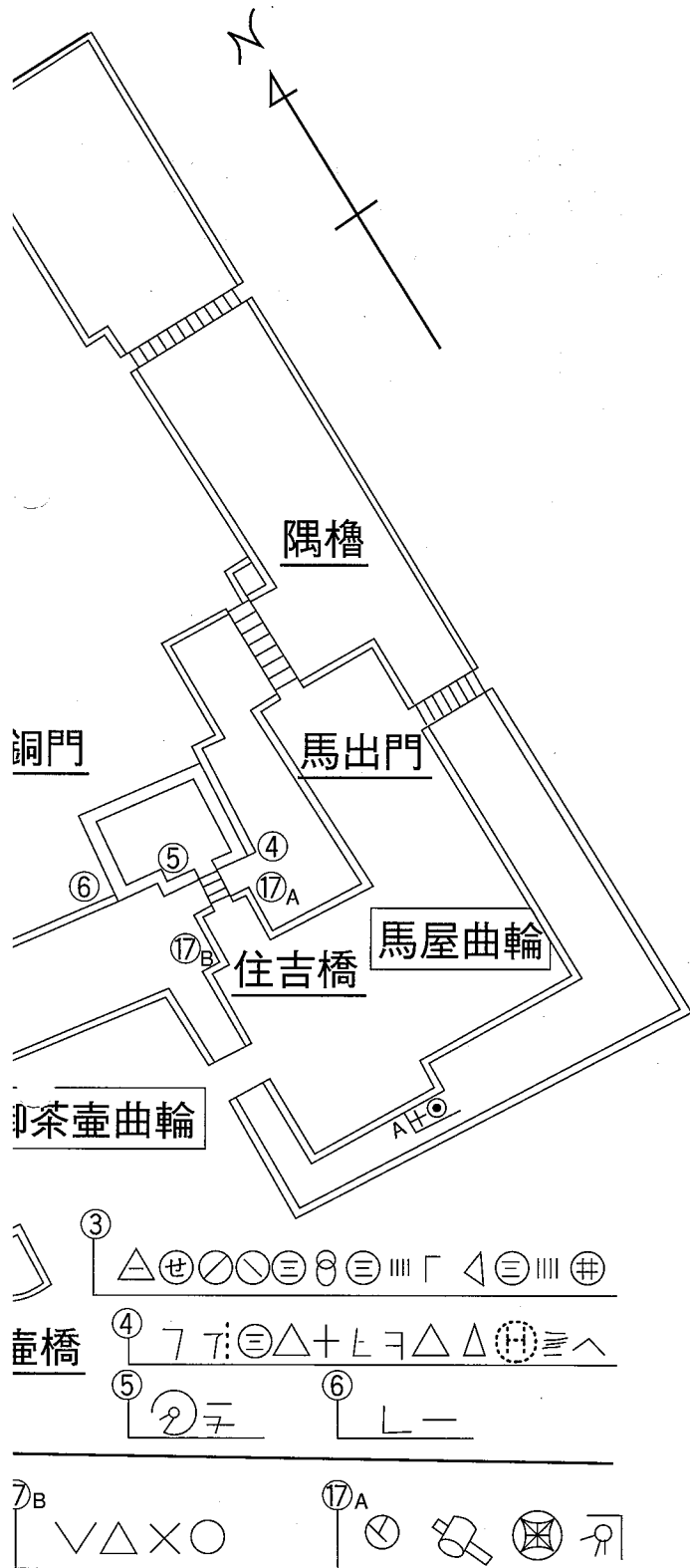
二〇〇〇年までにと、調べましたので、今まで発見した刻印の記録をまとめてみました。次の刻印一覧表は、私の長年にわたる「小田原城石垣の刻印調査」の集約です。見落としもあるかと思しますので、この他がありましたならばお教えください。

一応の、天守閣を巡る石垣刻印調査結果の一部です。刻印の種類が多さに、まず驚かされました。これらの形、大きさ、数、位置

などの記録をもとに、各地の大名配下の石工集団を調べ、当時の築城の動きを探りたいと思っています。

すると、久野地区に散在している、石丁場の紋や刻名についても、解明の手掛かりが得られる気がします。(松永記念館の石段にも同じ刻印が見られます)

追、平成十二年四月九日
小野家山林、(前文三ツ葉柏の発見された字石小屋の隣山) 鶴巻にて松平土佐守の刻名石を発見致しました。



小田原叢談 (四十)

石井富之助

小田原と宏道流

生花について特別趣味を持つているわけではないが、生花というところ、宏道流のことをわたしは思い出す。

それは多分祖父が遊雲斎鴻山という名の宏道流師範であったからであろう。子供のころ、祖父が床の間に花をいけているのを見ていたこともある。また縁側にふとい猛宗竹の筒を持ち出して花器を作っていた。竹をみがいしたり、切り口にうるしを塗ったりしているのがめずらしく、首をのびして見ていると、「あんまりそばによるとうるしにかせるぞ。」と注意されたこともあった。

そのころわたしの家では、今の錦通りと裏町の角のところは相当広い地所を持っていた。ここは西田義助という藩士の屋敷跡だったので、みんな「西田、西田」と呼んでいた。西側には錦通り寄りに猛宗竹、奥の方に真竹のやぶがあり、東側にはかなりの数の梅の木が植えられていた。祖父は花器作りの材料としてこの猛宗竹を使っていた。

祖父は大正六年(一九一七)、七十八才でなくなった。わたしが小学校六年の時であったから、正確には覚えていないが、師範といっても門人をとって教えるといったことはなかった。家業の呉服商を父にまかせたのちは町会議員その他の公職のかたわら、もっぱら生花は趣味として楽しんでいたようである。

祖父が師範であったからであろう、姉や姉の友達はみんな宏道流を習っていた。そのころ小田原ではかの流派がどの程度行われていたかまるとつきり知らないが、明治から大正にかけて最も流行していたのは宏道流ではなかったか。当時、花嫁修業といえは花は宏道流、琴は山田流、裁縫は新名さんか石井さん。これが通り相場になっていたのではないかという気がする。子供のころのほんの身近な見聞をもとにしていっているのだからあんまり当てにはならないけれど、宏道流についてはわたしだけの感じではなく、そう考えられる節がなくてはならない。

いったい宏道流とはどのような流派であったのか、大百科事典をひいてみると、次のように書かれている。

宏道流 生花の流名。江戸の人梨雲斎望月義想(文化元年二(一八〇四)歿)が明の袁宏道(中郎)著の「瓶史」を愛好して挿花の想を纏め挿法を起したものであり、最初は袁中郎流挿花と称えたが、後に宏道流と呼ばれ、遂にそれが流名となった。梨雲斎の門下に江戸の人青雲斎溪崖(寛政九年二(一七九七)歿)あり、「瓶史」を甚だ愛好し、その門人に徠雲斎桐谷鳥習あり、江戸末期に発達した流派である。宏道流挿花の家元は梨雲斎と青雲斎の二家となり昭和時代に至るもなお対立している。

わたしは今でも「遊雲斎石井鴻山」と書いてある木の名札と「袁中郎流挿花図会」十一冊とを所蔵している。祖父の遺したものはこれだけで、手作りの花器などはすべて関東大震災の時烏有に帰してしまった。

この書物は文化四年(一八〇七)から六年にかけての出版で、宏道流の原典ともいべきものである。前編、後編に分かれており、両編ともに徠雲斎先生註「瓶史国字解」と諸先生編著「挿花図会」とが組合わされて一書となっている。前編巻末の広告を見ると、前編七冊、続編六冊、全

十三冊とあるので、わたしの所蔵本は二冊欠本ということになる。しかし、内容を点検していくと首尾一貫していてどこにも落ちがない。これについてはもう少し検討する必要があると思っている。

実は、この本は格別必要もないので、紙包みにして長い間棚の上のせっぱなしにしておいたのだが、包み紙が汚れ、ポロポロになったので、包み替えようと思っておりました。そのついでに中身を繰ってみました。足柄上、下両郡の人々の挿花図がいくつも載っている。それに興味をそえられる「挿花図会」全部に目を通すことになったのである。

まず前編の大部分は江戸の師範で、それに下総、上総、加賀の何人かの挿花が収められている。続編の挿花図は巻二から始まっているが、その巻二には越後、甲斐、尾張、三河の人々の作品、次の巻三は「相州連」という註記があって全部が相模国の人々、巻四は武蔵国、巻五の大半はまた相模国の師範並びに門下の作品で埋められているのである。

通覧してすぐ気のついたことは、図会八冊のうち江戸が三冊、相模国が二冊を占めていることである。これは宏道流創始直後、その普及活動がまず江戸において展開され、ついで相模国に力が注がれたことを示しているといえると思う。

この相模国の分をもう少し詳しく見ていくと、続編三に採録されてい

る挿花図は全部で五十六図、そのうち武蔵国の四図を除いて相模国のは五十二図あり、また統編五では総図数三十九図のうち三十五図が相模国の人々の作品となっている。

「袁中郎流挿花図会」は宏道流師範を除いて一般にはあまり見かけないので繁雑とは思いますが、後の研究者のためにその氏名を列挙しておこう。

統編三

徠雲齊門人
相州湖之辺

龍像寺 啼雲齊風吟

(以下相州につき、地名頭の相州を省略す)

高坐郡七ツ木村住

岸久太郎

厚木住

美雲齊画雞
曙雲齊梧井
想雲齊專魯

越智次助
素柳

恩馬邑
寛雲齊眉山
林雲齊穴口

愛甲郡林邑
其 中

妻田邑
其 柳

比井忠蔵
烏 扇

萩野郷
隆雲齊其風

愛甲郡及川邑
桐生忠兵衛

伊勢原住
戯 蝶

大住郡住
呉竹亭叙来

中原住 小川玄貞
暎雲齊総羽

入野邑 江原啓助
量 可

大住郡住
暢雲齊国花

片岡村

大沢市作 湖 舟
久保寺牛五郎 五 鶴
金目村 森文右衛門 嵯雲齊百亀
下谷村 石川福也
波多野 碧雲齊和暁
臥雲齊盧眠
台雲齊阿仙
呉雲齊文雅

大住郡大槻村

安居院平八 皐雲齊梅素

小田原久野邑 東泉蘭若一草

足村郡府川住 新川 稻子

久野邑 保壽寺 古 仙

大磯駅 石川碩隆 二 扇

津久井県中沢邑 子 禮

島久保邑 四方庵水禮

子 燠

少年 長 松

閔邑 凍 雨

小網邑 青 峩

小野沢兵左衛門 王 龜

窪沢町 角屋伊八 蒼 鳥

小谷戸村 東 溟

西山七郎右衛門 青潮亭周方

江之島下之坊主 喜 常

江之島 山口雄八郎 喜 常

西之浜 西方菴秋國

江之島住 鳥 流

北村忠左衛門 鳥 流

宇田川弥平太 芳 州

高坐郡藤沢駅 西川伊三郎 光 石

鎌倉住 雪地觀鏡水

高坐郡恩馬邑 尾上佐右衛門 尾 蕉

金子邑 審珠山戯裂

統編五

徠雲齊門人
大住郡矢石

狩野庄 舍雲齊龜旭
瀧雲齊如泉
集雲齊和翠

川村向原 瀧雲齊文季

大住郡皆屋村 中村瀧次郎 平雲齊鳥海五雲

上平間村 明雲齊中村磐水

松田住 白雲齊北村三雪

鍵和田伝兵衛 朗雲齊梁石

狩野庄金井島 朗雲齊登鳥

下山弥五右衛門 岫雲齊登鳥

川村岸 川口栄治 栄 岡

武井辨蔵 其 道

府川永治 某 藥

武井栄次 露 井

坪之内住 近藤織部 梅 翁

大住郡落幅邑 知 足

久保寺孫右衛門 知 足

矢名宿 大戸豊吉 岨 鳥

大井庄鬼柳村 文雲齊金鷲

鬼柳山 文雲齊金鷲

永塚村 河村嘉助 仙雲齊五通

狩野庄牛島邑 草柳如森

竹松邑 露 仙

新土邑 吉田多仲 袖 広

徠雲齊門人
武市之進 岷雲齊東雅

岷雲齊門人 阿雲齊和水

大住郡大山町 磯部要人 鐘雲齊桂雅

田城清兵衛 櫻雲齊都月

田城初治郎 虹雲齊楚江

龜井良蔵 積 雪

鈴野善大夫 湖 映

高尾豊後 荒井栄之助 牛 雪

大矢栄治郎 鶴 翠

武藤吉蔵 府 月

古満屋与四右衛門 東 雪

雨降山中 陽海堂大瓢

この名簿を通覧すると大山町の十二名を筆頭にして伊勢原、厚木、秦野、大住郡等大山周辺地域に師範並びに門人が集中していることに気がつかれるであろう。

また統編三の新川稻子のページに「文化三年丙寅(一〇六) 秋九月初二日、徠雲齊門人相州連中四百四十六人、於雨降山挿花大会之御挿之」と

いう記事がある。

これらを総合して考えると、相模国に対する宏道流の普及活動は大山を據点として行われたといつてよさそうである。また足柄上、下両郡だけを見ると、二十二名が採録されていて、相当普及していたことがうかがわれる。

ここでちょっと奇異に感じられるのは、大久保藩領内の各村には師範と呼ばれるものがかなりいるのに、小田原の町の中には一人もいないということである。創始当初のことでもまだ小田原まで進出する力がなかったのかも知れない。それならば、小田原ではどの流派の生花が行われていたのであろうか。宏道流より古い流派としては古流、池の坊、遠州流などいくつもある。しかも、文化年間といえは大久保家中興の祖といわれる忠真の時代である。藩士ならびに町家の子女が生花を全然やらなかったはずはないと思うが、この辺の研究はまったくされていないので皆目わからない。

しかし、幕末になると山角町天神社別当庭松寺の住職で護雲齋という人の名が出てくる。「新編相模国風土記」によれば居神明神社のところに、

別当庭松寺 曹洞宗 板橋村
居神山ト号ス。 香林寺末
開山明庵文聰 本寺四世、弘治三年
正月二十七日卒

とあるが、多分これであろう。

明治に入って、この護雲齋の門下から一世蜀雲齋川口宗作が出ている。

大久保神社のそばに一世蜀雲齋と二世蜀雲齋の二つの碑が建つており、その碑文は郷土文化館発行の「小田原の金石文」一に収録されているが、その解説によると、

一世蜀雲齋川口宗作は本名川口平四郎と称し、茶畑町に生まれ、明治の始め戸長や郵便局長になり活躍したが、華道は山角町天神社別当庭松寺の住職護雲齋に学んで蜀雲齋を名乗り、茶道は小田原藩士畔柳宗拙に学んで宗作と号した。壽碑は、蜀雲齋七十二才で引退の時に華道、茶道の両道の弟子達が長壽を賀して

建てたものである。

この碑は明治三十九年二月に建てられているが、二世蜀雲齋は鎌野平八といい、一世の門人数百人のうちから選ばれて二世を継いだという。門人数百人といえは大したものので、これだけでも、明治大正期における宏道流の繁栄がうかがえるのである。わたしの祖父もおそらく一世蜀雲齋の門人だったのであろう。

三世蜀雲齋岩下清香になると祖父や父とも親交があり、わたしもよく知った人で一層身近かになる。昭和二十六年になくなされたが、碑は板橋見付光円寺の境内にある。

宏道流には古くから「相模宏道」ということばがある。いつころから、またどういう意味でこのことばが使われたのか知らないが、ここにひとりが注目すべき師範がいる。暁雲齋柏木蝶習がそれである。



カット 内田美枝子

俳句、絵画をよくし、中でも俳句は静岳と号して凌霜庵二世をつぎ、華道は宏道流西郡家元六世として活躍し、本流中興の祖と仰がれた。大正の始めごろ東京に一大教場を開いて子孫の青英に努めたが、震災後、山北に閑居し、昭和六年に歿した。その流れをくむ門下は実に七千に及んだという。

大百科事典の記述によれば、宏道流は梨雲齋と青雲齋の二家にわかれて今日に至っているというが、ここにまた西郡家元というのが出てきた。いったい柏木蝶習は梨雲齋と青雲齋のどちらに所属していたのか、あるいはそれとはまったく別に家元を名乗っていたのか、また相模宏道と西郡家元との間にどのようなつながりがあるのか、これらの点について調べてみたらきつとおもしろいんじゃない。

しかし、わたしは研究者ではないからこれ以上追求するつもりはない。あまり苦勞をしないでも身近かにこれだけの資料がある。それを放置しておくのはもったいないので、この小文を書いたわけである。

いずれにしても、蜀雲齋や暁雲齋のことを考えると、明治大正期に小田原で生花といえは宏道流だといったことが、まんざら根も葉もないことではなかったということがわかるのである。

(つづく)

碑は昭和十二年に門人六十名によって栢山の善栄寺に建てられている。それによると、柏木蝶習は名を金次郎といい、文久三年十二月十二日栢山に生れた。和歌、

明治の書簡でつづる

相田軍曹と日清戦争(九)

無残、澎湖島の戦い

瀬戸長治

熱病に犯されて

(宛名)

大日本帝国神奈川県

足柄下郡早川村

相田磯吉殿

平信用

(差出人)

清国新占領地 澎湖島

混成枝隊後備歩兵第一聯隊

第八中隊 高野美次郎

(文面)

謹啓 のぶれハ、我ら未ダ尊顔ヲ得ズ候。しかしただ今相田君二代わり、部下一同ヲもつて申し進め候。さて、去月廿三日澎湖島ニ無異上陸つかまつり候。その後まモナク熱病ニ犯サレ、直ちニ入院遊ばされ候ところ、絶つて病中の模様音さたこれなく打ち過ぎおり候。その後二いたり、同君ノ有様申し訳なく候。医薬効なく、遂ニ永眠セラレシトハ。部下一同ニおいてモ罔らず候ところ、天命数ヲ仮サズ、今逝去セラレ候。

実に、御一家ノため定めてご愁傷の段、恐れながら□□程察スルニ余りアリ。これまた国家義務のためナ

レバ是非ござなく候。吾等今こゝニ取りあえず同君二代わり申し上げ候。いずレ委細ハ脇山伝吉君ヨリ申し進め候ようご依頼申しおき候なり。

四月十四日 部下一同ヨリ

相田磯吉殿

お悔み

(宛名)

神奈川県足柄下郡キジ引早川村

相田なお様

(差出人)

東京麻布 歩兵第一聯隊

補充大隊 第二中隊第五班

郷里在所米神村 廣石政吉

(文面)

短書拝呈 のぶれば、先達て書面到着、拝見候ところ、貴家代吉様、征清戦争の際病死の由、貴殿方二対シ実ニお気の毒ニござ候。しかシ、国家ヲ保護スル軍人ニ従事シ、もつテ足下名譽ヲ執揚セラレ、我日本國ニたいシ光榮顯シ候モ、吾ニ至リテ

ハまことニ不幸ニ候ども、遠征中名譽の戦死、たとい病死ニセヨ、国家のため身ヲ捨ツルは異変ナシ。

はじめに

「相田家文書 について」相田家系略図

☆弥生館から浦賀へ

弥生館に宿営(相田代吉より磯田磯吉あて) 明治27年9月1日

無事入隊を祝し(磯吉より代吉あて) 9月5日

面会に参るべく(磯吉より代吉あて) 9月6日

馬車鉄道で無事帰省(磯吉より代吉あて) 9月10日

浦賀町駐留の兄へ(磯吉より) 9月20日

駐留地移転の連絡(代吉より相田本家あて) 9月24日

慰問品の発送の知らせ(石田弥五平より代吉あて) 9月28日

鈴木善左衛門の慰問文(相田代吉あて) 10月2日

駐留毛への札状(兄に代わつて磯吉より浦部・石井文吉あて) 9月29日

帰省用洋服持参の依頼(磯吉より代吉あて)

☆東京麻布第二聯隊

(東京)見物において(代吉より妻あて) 11月4日

留守毛への指示(代吉より妻あて) 11月26日

前村坂の死去(根府川・廣井長十郎より代吉あて) 12月20日

帰省申請書(早川村外四カ村組合役場より代吉あて) 12月18日

海蔵寺住職の賀状(代吉あて) 明治28年1月2日

國府津停車場で面会を

(早川村杉崎甚五衛門・林為之り代吉あて) 1月30日

面会後、家族無事帰省(磯吉より代吉あて) 2月5日

七日十時の面会について(石田弥五平より代吉あて) 2月5日

☆廣島から澎湖島へ

出征の連絡(代吉より妻あて) 2月13日

話によれば台湾へ(代吉より妻あて) 2月23日

乗船を記に(代吉より相田本家あて) 3月5日

馬関(下関)港にて(代吉より相田本家あて) 3月8日

海軍の参戦(代吉より相田本家あて) 3月14日

敵軍に接(代吉より磯吉あて) 3月21日

澎湖島の戦い(代吉より磯吉あて) 3月28日

(以上七五・一八)

熱病に犯されて

(第八中隊部下一同より磯吉あて) 4月14日

お悔み(米神村廣石政吉より代吉妻へ) 4月30日

第八中隊長からの書簡(相田代吉家あて) 5月1日

表彰状(足柄下郡長官報告書長) 9月26日

従軍記者之証(賞賜局総裁) 11月18日

発見された絶筆(代吉より相田家あて) 3月28日

あとがき

明治二十八年五月一日

(文面)

拝啓 のぶれば、相田代吉君儀、去月わが軍澎湖島ヲ占領候際、両日ノ戦いニ勇進奮闘その功少なからず候ところ、戦後悪疫流行シ、不幸ニモ病魔の侵スところトナリ、同月三十一日病死いたされ候。

初メ、死者ハ皆火葬ニシテ、遺骨ヲ親戚ニ送ルはずニテ、東西本願寺ヨリ僧侶四人まで従事シ、死者ヲ取り扱ひおり候へども、病勢日々激烈ニ及ビ、毎日入院スル者百余人モコレあり、一時ハ入院患者ほとんど千

八中隊から書簡

大日本帝国神奈川県

足柄下郡早川村二十番地

相田代吉殿御家族御中

(差出人)

混成枝隊 後歩第八中隊

人モ多キニ達シ、したがって、死亡スル者日々ますます増加シ、実ニ惨状ヲ極メ候。折柄従軍僧侶ノウチニモ死亡者これあり、遂ニ一々火葬スルコトあたハズ、遺憾ながら、頭髮のみ送ルことニ相なり候ところ、こゝれも国家ノため一命ヲ捨テラレシ義ニ候へば、御あきらメなされた

く候。先ずは、ご披露かたがたお悔みまで、かくの如くのご遺骸。不備追つて、右始末シ候ゆえ、所持品悉皆焼却候うちニモ、一点清潔ノ品これあり候ゆえ、後日お送り申し候。

明治廿八年五月 日

後備歩兵第一聯隊第八中隊長
相田代吉殿御家族御中

二二信

拝啓 過般病死いたされ候、わが軍友の遺骸ヲ、一時火葬ニスルことあたハス、埋葬スルノやむヲ得サルニ至り候次第ハ、すでにご報申し候とおりにこれあり候えども、従軍僧侶、一々法名ヲ選ビ経文ヲ誦シ、懇ろニ葬儀ヲいたし候ニ至つてハ、右両者とも同一ニシテ、いささ力異ナルところこれなく候。

別紙法名ご送付に及び候間、ご受

領くだされたく、尚又、埋葬地ハ当時改築中ニテ、落成ニ候うえハ招魂祭執行いたされ候はずニつき、予メ御報申上げおき候。

明治廿八年五月 日

混成枝隊後備歩兵第一聯隊
第八中隊長
相田代吉殿御家族御中

日本帝國明治二十七年從軍記章之證

故陸軍歩兵一等軍曹相田代吉相續人

相田 義

明治二十七年從軍記章條例ニ依リ
陸軍大臣ノ奏請ヲ允シ明治二十八年十月八日
勅定ノ從軍記章ヲ府與シ以テ之ヲ保存セシム
明治二十八年十一月十八日

奉勅



賞勳局總裁正三位勳一等子爵大給恒

此證ヲ勅查シ第百九百九十五號ヲ以テ

明治二十七年從軍記章簿冊ニ登記ス

賞勳局書記官正五位勳四等横田香苗

賞勳局書記官正七位藤井善言

▲從軍記章之証

賞勳局總裁より相田義宛て

表彰状

表彰状

故陸軍歩兵一等軍曹 相田代吉殿
征清軍ニ從ヒ、忠勇戰ニ臨ミ、不幸
病ニ斃ルトいへども、遂ニ空前ノ大
捷ヲ奏ス。芳名永ク不朽ニ伝フ。
依つて、本會ノ議決ニ基キ、從軍記
念トシテ木盃一組ヲ追贈シ、こゝニ
微衷ヲ表ス

明治二十八年九月廿六日

此の如く、相田代吉君は、征清軍に從ひ、忠勇に戦ひ、不幸にして病に斃れ、遂に空前の大捷を奏す。芳名永く不朽に伝ふ。依つて、本會の議決に基き、從軍記念として木盃一組を追贈し、ここに微衷を表す。

明治二十八年九月廿六日

▲発見された絶筆 明治28年3月28日 代吉から相田家へ

足柄下郡兵事報労会長

正七位勲六等 中山信明(印)

早川村

相田 ナカ殿

※ナカは、ナヲの戸籍名らしい。

発見された絶筆

澎湖港ニハ我軍艦及運送船殆ント、式拾隻入港、汎檣(ほぼしら)林立到居候。戦争ハ少シモ恐ル事ハアリマセヌ。只水・土ノ変・病人ノ多キニハ困却仕候。生は極壯健ナルモ、衛生ニハ万々注意致居候間、御安神可ニ相成ニ候。宝丹・外郎少々御送付相成候様致度候。右ハ送付相成哉、如何ヤ不ニ判然ニ付、能ク御間合セ之上、御施行可被成候。只今現ニ、宝丹式ケ、千金丹様ノ葉巻ケ、堀川好才君ニ貰ヒシ水薬巻ケ持居候。

三月廿八日正午 認

於新占領地

相田 代吉

相田家御中

あとがき

平成十一年になつて、相田家の仏壇の奥から、前掲の代吉の書簡が出てきた。日付は、「三月二十八日正午認」となっており、「醜検査・製酒検査」などの文字が印刷された薄手の罫紙の反切が使われている。同日に書かれたと思われる『澎湖島の戦い』と比べると、文章はたいへん短く、内容は初めの二行でわが海軍の

威容を誇り、自身の戦意の高さを強調しているが、後の五行余りは病氣や薬のことに終始している。「ただ水・土ノ変・病人ノ多キニハ困却仕候」ということばに、代吉のほとほと弱っている様子がうかがえる。また文末は、「水薬一ケ持居候」と、自身の現状を書くにとどまっている。困却の対象は台湾の風土病やコレラのことであろうが、その予防や治療の対象として、「宝丹・外郎」のような漢方薬を、しきりに入手しようとしている姿が哀れである。

その現状を、どうしても家族に伝えておきたいと思ひ、書簡『澎湖島の戦い』を書き終わった後、また気を取り直して筆をとったのではなからうか。この後まもなく罹病した代吉は、三日後の三十一日に戦病死した。恐らくこの書簡が、代吉の絶筆になったものと思われる。

戦いに勝ち、じゅうぶんな戦意を残しながら、無念にも病魔のおかすところとなり異境の土と化した、郷土の勇士相田軍曹の御冥福を念じつつ筆をおきます。

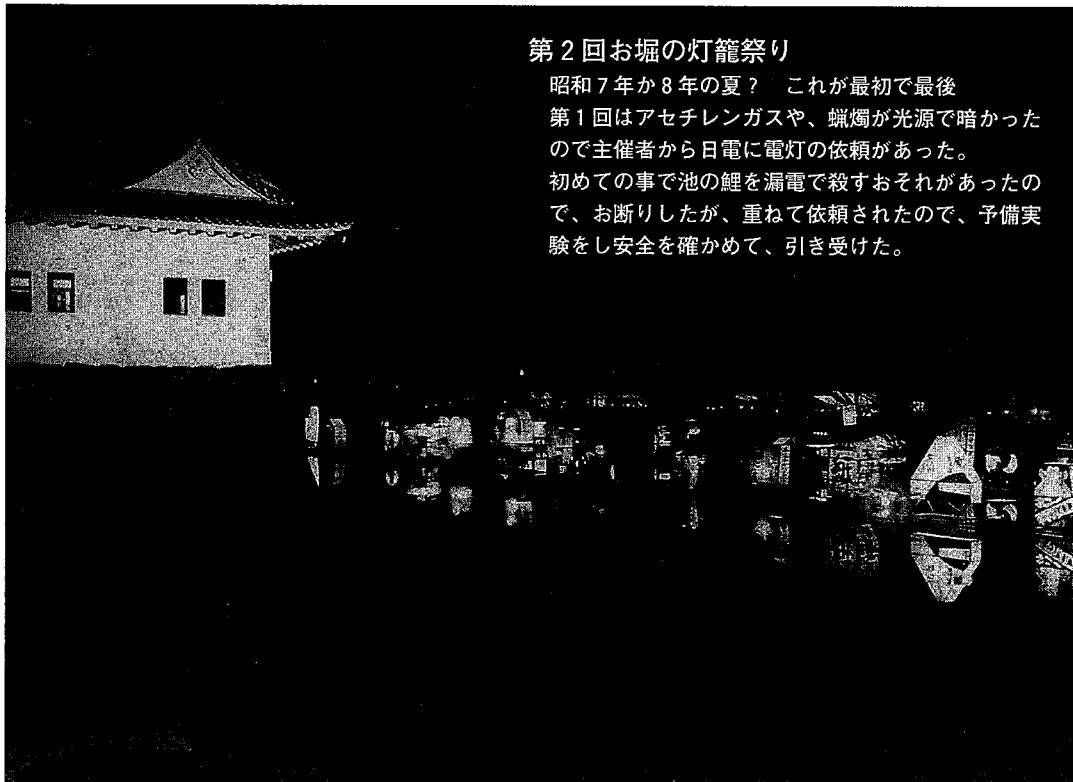
因みに、檜山幸夫はその著『日清戦争』で、澎湖島の惨状を次のように述べている。

「佐世保で発生して以来、コレラに感染した患者は千七百名余にも達し、そのなかで病死した者は、大本営副官部員の林田游亀歩兵大尉以下七百三十六名にのぼっている。澎湖

島作戦における犠牲者は、戦死者四ら、病死者は戦死者の百八十四倍に名に負傷者二十六名であったことかもなっていた。」(完)

第2回お堀の灯笼祭り

昭和7年か8年の夏? これが最初で最後
第1回はアセチレンガスや、蠟燭が光源で暗かったので主催者から日電に電灯の依頼があった。
初めての事で池の鯉を漏電で殺すおそれがあったので、お断りしたが、重ねて依頼されたので、予備実験をし安全を確かめて、引き受けた。



写真提供・説明

市川一郎
当時の電灯工事を担当した

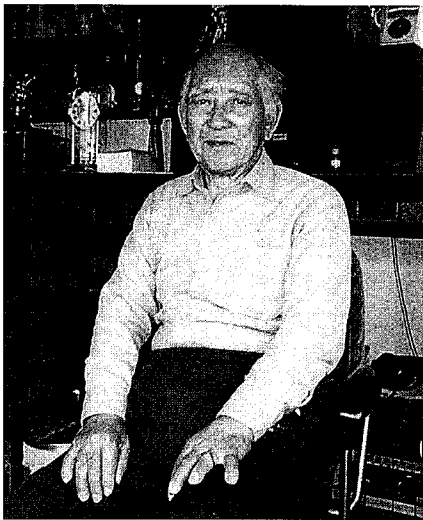
足柄地方最後の野鍛冶

古川惣平さん(77)に聞く(二)

シベリヤ抑留・終戦後

シベリヤ抑留と復員後

鍛冶屋の修行中、昭和十七年、二十歳で兵隊検査(徴兵検査)を受け、一年後の昭和十八年四月、千葉県市川市の「国府台」にあった野戦重砲の部隊に入隊しました。十日ほどそこで敬礼の仕方とか、行軍の仕方などの訓練を受け、そのあと直ぐに、窓をふさいで外が全く見えなくした列車に乗って、下関まで行きました。兵隊輸送の列車は秘密だったから、外からも何の列車か分からないようになっていたのです。途中、同じ部隊にいた親戚や知り合いの人達のお



後ろ半分に乗った私たちは朝鮮半島の釜山に上陸、満州の牡丹江の奥の八面通という所へ運ばれました。そこには関特演で昭和十七年に招集された三十代の兵隊さんが多く、我々は、交代要員として配属されたのです。暫くして三分の一くらいの人が帰国しました。すると残された人達がヤケになって、休みの日に大酒を飲んで喧嘩したり、我々初年兵に当た

りちらしたり、大変でした。国に妻や子を残して来た人達が多かったから、無理もなかったと思います。八面通は国境に近く、なんにもない辺鄙な所でしたから、休みの日には我々も酒保に行つて酒ばかり飲んでいました。

八面通には一年ほどいてチチハルに転属になり、一年経つた頃、そこで終戦を迎えました。終戦近くまでは静かだったのですが、突然国境からソ連軍が戦車で攻めてきて大混乱になりました。日本軍には大砲はあつても弾がない、兵隊がいても戦争になりません。

終戦とわかつて、大砲を貨車に積んで白頭山に退却することになったんですが、満人の機関手が逃げてしまいい日も汽車が動かない。仕方なく空倉庫のような所に二週間くらいいたのですが、このままではいけないと思つて、糧秣庫から米や砂糖などを取り出して、皆、背負えるだけ背負つて逃げ出しました。道も分からぬまま一週間も逃げていた間に体が衰弱し、折角持つて来た物を一つ捨て、二つ捨てて最後には身一つになりました。その時の体験から、本当に困つた時は米も砂糖も要らないが、水と塩だけはなくてはならないとつくづく思いました。

満人が井戸に毒を入れた等と流言が飛び、うっかり水も飲めなくなつ

てしまったので、我々は大きな集団を作つて、終結するようにといわれた牡丹江へ向かつて動き始めました。これで日本へ帰れると、誰もが思つていました。少しでも早く行きたいと、隊を離れて十人、二十人とグループを作つて行動した人たちもいましたが、その人達は、兵隊が捨てた武器を持った満人達にやられてしまったそうです。大勢で一緒に行動しないと、とても危険だったのです。開拓団の人も一緒に逃げました。女の人は髪を短く切り、男のような格好をして、皆必死で逃げました。「兵隊さん助けて」と言われても自分が逃げるのが精一杯でしたから何もしてやれず、広いばかりで道もなく、電柱のような目標になるものも何ひとつない野原を歩き、やつことと目的地の牡丹江へ着きました。しかし日本へ帰れる訳ではありませんでした。満州全域、朝鮮北部、千島列島から集結させられた兵隊や、民間の働けそうな男という男達が、牡丹江をはじめあちこちに集められ、六十万人もの人達がシベリヤへ送られました。そのうちの約一割が亡くなったという話です。

シベリヤでの我々の仕事は主に鉄道建設でした。私も最初は穴掘りや伐採、馬方などいろいろやりました。が、幸いにも鍛冶屋という特業があつたので、先端が駄目になった鶴嘴や、いたんだ工具の修理など、五

年間のシベリヤ生活のうち、鍛冶屋の仕事は三年くらいやりました。大工や左官屋などの特業をもった人も、それぞれの腕を活かして仕事をしていました。シベリヤの寒さはもの凄くて日本では想像もつかないほどですが、鍛冶屋は家の中でも火を使う仕事なので、その点は良かったと思います。

食料は配給で主食はクロパン、一日一人三五〇グラムづつ与えられました。これがパンかと思うほどひどいもので、初めはまずくて食べられませんでした。他に食べ物があるわけではなく、だんだんに馴れてきて、分配する時大きい小さいでもめたり、手製の計りで同じになるように量ったり、今思うと笑い話のようなことがいろいろありました。しかしその時は皆真剣でした。

それからスープ、我々はあまりにも薄いので、ワタスープと言っていました。ワタつまりWATER、水です。塩味で殆ど何も入っていないので、たまに突らしいものが見つかるので、運が良かったといって大切に食べました。野菜がないから壊血病にかかる人が多く、肌が鳥肌のようにになって、毛穴からぶつぶつ血が噴いてくるんです。そうしたら「松葉を煎じて飲めばよい」という人がいて、唐松の葉を煎じて飲みました。松ヤニ臭くて飲めたものではなかったけれど、厭でも何でも飲まなければ

ばならないと無理して飲みました。おかげで生きていられたようなものです。大勢で生活していますから、みんなで知恵を出し合い、誰かしら何か考えてくれたものです。

シベリヤでは半年くらい毎に転々と移動させられ、その度に仲間も変わりました。最後はナホトカでした。海の見えるところに来たので、「これでやっと日本に帰れる」と喜びましたが、後から来る人達の面倒を見てくれといわれ、結局そこへ残ることになってしまいました。先に帰る人の中に小田原の人がいたので、自分が無事でここにいることを留守宅に知らせたいと頼みました。一年半ほどナホトカにいて、やっと帰国することが出来ました。

家に帰ったのは昭和二十七年だっと思います。三十一歳になっていました。終戦後歳の数え方が変わったので、満では三十歳です。数え歳で二十二の時から三十一まで足かけ十年、家族とは国府津の駅で会って以来一度も会えず、人生で一番素晴らしい時期を戦争のために失ってしまったようなもので、青春はありませんでした。

家に帰ってから、また父親と一緒に鍛冶屋をやりました。戦前、戦後の製品の変化は少ないけれど、販売方法は変わりました。昔は製品を自分の家に置き、お客が買いに来てく

れたのですが、戦後は農協に販売を頼むようになりました。少しはうちにも買いに来てくれましたが。

鍛冶屋は一昨年まで続けていたが、七十五歳になって止めました。年をとると体も大変になってくるし、田畑が減って農家も少なくなり、農業の機械化の影響もあって需要が減ってきたからです。大量生産の農具が出回ってきたことは、それ程関係ありませんでした。農家の人は、やはり地元で造ったものが使い勝手が良いからと、買いに来てくれましたから。

息子は後を継がないで別の仕事を始めました。時代の流れもあるので、私は鍛冶屋をやれとは言いませんでした。

若い頃やっていた柔道は戦争で中断、帰ってきてからは、それ程熱心に稽古を続けていた訳ではありません。振り返ってみると、一生懸命にやっていたのは徴兵検査まで、四年ほどです。しかし仲間誘われ、昔やっていたということ、一時は小田原柔道協会の副会長をしていましたが、今では顧問ということになっています。会員は約一〇〇名、毎年

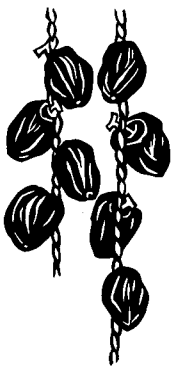
総会があります。その他にも一月の「武道始め」、「市民総合体育大会」、「少年柔道大会」などには出かけて行って、若い人達との交流を楽しんでいます。昔、小田原の柔道の普及

に力をそそいで一緒にやってきた仲間、今はもう誰もいなくなつて、私一人になつてしまいました。思い返すと懐かしく、又淋しいことです。

平成四年、一週間の予定でシベリヤに慰霊に行きました。新潟に集合して飛行機でハバロフスクに飛び、七班くらいに分かれて自分達がいた所を廻り、慰霊をしました。モスクワの方に行つた人もいました。私はハバロフスクのあたりを廻りましたが、日本のように交通の便利な所ではありませんから、貨車に客車を繋げてもらつてあちこちに行きました。その後も慰霊のための旅行は、厚生省の援助があつて毎年行われています。私は一回しか行っていませんが、最近では戦友より遺族の参加が多くなつています。

また、遺族による慰霊団の全国組織が出来ていて、一年に一回国内で集まりがあります。去年は舞鶴に行つて来ました。今年には石川県と決まっています。旅行がでたら、楽しみにして行ってくるつもりです。

(聞き手 早川初枝)



酒匂上輩寺三十四世桜沢堂山の研究(四)

谷口得二

黙阿弥(河竹新七)の処女作といわれている「昇鯉滝白旗」(嘉永四年十一月興行)の中の二番目「えんま小兵衛」二幕三場の世話物の創作経過について、河竹繁俊は「河竹黙阿弥」なる著者に次のような堂山についての挿話が述べられている。

それはこの作の出来た夏の事であった。黙阿弥の門弟の一人に能晋輔といふのがあった。晋輔は始め浅草日輪寺で役僧まで勤めた沙門の身であったが、常盤津の女師匠に現をぬかした末に寺を逐はれ、やがて黙阿弥の門下となったのである。その後その女に恥しめられたのを根に持って殺害しようと思立ち、天道干で買った出刃包丁をケシ玉の手拭に包んで腰に差し、まさかの時の用心に剃刃まで二の腕に結びつけて、いざ躍り込まうといふ時になつて露見し、自身

番沙汰にもなつた所から、黙阿弥はこの先何か生じた場合を案じて確かな保証人を拵へると命じた。そこで晋輔は以前寺で入懇にしていた高沢某といふ亀井戸の仏師屋を推挙したのであ

る。或夏の夕、黙阿弥と晋輔と連立つて、宿元を見届け旁々判を取りに仏師屋へ行った。狭苦しい棟割長屋の裏住居で、七月のことで……亭主がギロリと光る眼付で……あ、面白い図だと、深い印象を残して帰つたのである。これから思ひ付いて、顔見世の事ではあり、節介の神事を取入れて綴つたのが「えんま小兵衛」であった。

ここに記述されているように、日輪寺に入山した沙門堂山も煩惱に纏弄されて、遂に僧衣を剥奪されなければならぬ仕末になつたのは確かである。

天保の改革、禁令を繕つくろいてみると、天保十三年三月十五日には唄、浄瑠璃、三弦の女師匠の弟子取り禁制が発令されている所をみると、その前にもこの風習が流行していた経路があつたように思われる、当然これには売色の面があつての上の禁令と思われるけれども、この禁令も老中首座水野の失脚からは急速に逆行りし始めて、嘉永に入る頃には全く旧状に復していたことは、史書にも記述されている通りである。この事実

を省りみて、堂山の女師匠二件を考へ合わせてみると、何としても、そのことは嘉永に入つてからの一件と理解する方が妥当のようである。

堂山の黙阿弥への入門時期については、前記の『早稲田文学』所収の「河竹繁俊返書」中に、

紋番附へ能晋輔として載りしは、嘉永四年の顔見世よりなれども、嘉永三年の交ともに入門せしものと存候。嘉永三年とすれば三十歳に相成居候筈に御座候

この記録にある堂山の年齢は誤認として再調査の要がある。

次の問題は、日輪寺追放の時期である。上記の記事では、放逐即入門のようにも解釈されるが、これについては、同一著者による以下のよくな記録もある。即ち、昭和二年十月号『早稲田文学』「草双紙研究号」所載の種員及び種清と黙阿弥には、先記の記事とは、いささか、ことなる内容が述べられている。

黙阿弥は嘉永四年の十一月に、「えんま小兵衛」といふ、二幕の世話狂言を書いた。これが先づ処女作といふことになつてゐる。此作の主人公は、えんま小兵衛といふ仏師屋なのであるが、さういふ主人公をつかまへたのは、そもそも種清の身元引受人になつてくれたものに、亀

井戸の高沢丈山といふのがあつた。ある夏の夕、黙阿弥はその店をたしかめに出かけて行つた。狭苦しい棟割長屋の裏住居で、七月のことなにて、……たくましい亭主の仏師屋が、ギョロリと眼を光らせてゐた面魂といふ。そこへ、その薄暗い部屋の中に、……御首ばかりの地藏尊だの……雑居になつてゐる有様は、非常に印象深く、黙阿弥の頭にうつつた。これがやがて、えんま小兵衛地獄極楽隣り合せの趣向を生むに至つたものだと作者は語つてゐる。……日輪寺にゐるうち役僧までになつたのだが、常盤津の女師匠に、現を抜うかした末、傘一本で寺を追はれた、その女師匠に愛想を尽かされたので、天道干で出刃庖丁を仕込んだり、剃刀を二の腕にしばりつけるといふやふな身仕度に及んで、女の家へあばれ込まうとしたのを押へられて、自身番沙汰にまでなつたといふ挿話さへあつた。何しろ、さういふ噂の持主であつたから、確実な保証人をよけい必要としたのであつた。えんま小兵衛の出来たのは嘉永四年であるから、種清二十四五歳頃の話であつたらうと思ふ……

この記述と前記の記録とを比較し



てみると、いくつかの相違点を見る
ことができるので、それを列挙して
みると、

(一)身許引受人の姓名が前資料では
高沢某のみであるが、後の資料では
高沢丈山と記されている。

(二)この丈山の家に行ったのは、前
者では(黙阿弥は晋輔と連立って)とあ
る通り、二人で出掛けていると記し
ているが、後者では、黙阿弥、堂山、
両人で行ったとは記していなし、そ
の目的としては、前者は保証人の宿
元を見届け少々、判を取りに行った
のであるが、後者は「その宿をたし
かめに出かけて行った」のみであっ
た。

(三)当面の問題となる堂山の入門期
の時間的ずれとも受取られる前後両
資料の記述の喰い違いである。即ち、

日輪寺を追放された時期を決定づけ
る操作である、これを直接的に求め
る資料がないので問題が生じてくる
のであるが、前記資料だから理解
されることは、「やがて黙阿弥の門下
となったのである。その後、その女
を殺害しよう」としたと記している
ことから、この殺意の件は、たしか
に入門後であり、身許保証人の件も
確実に入門後の要求と受取れるので
ある。従ってある程度、堂山と黙阿
弥とは日輪寺時代に既に地理的關係
からも、宗派的關係からいっても、
何らかの交渉があつて、破門直後、
黙阿弥の許にかけこみ、黙阿弥も彼
を知るが故に、その文才を買って、
保証人なしで入門を認められたものとの
理解も成り立つ可能性もあり得るの
である。

しかし、後者の資料から解釈され
ることは、「自身番沙汰にまでなった
といふ挿話さへあつた。何しろ、さ
ういふ噂の持主であつたから、確実
な保証人をよけい必要とした。」と記
されてあるように、黙阿弥への入門
前に保証人を要求している、この点
に前資料との差異があるのである。
それ故に、これら二つの資料から
日輪寺追放の時期を直接探求するこ
とは全くむづかしい状況である。

堂山が狂言作者となるプロセスを
追求してみると、天保改革後、河竹
新七こと黙阿弥はまだそれほど高名
ではなく、彼が真に立作者として実

権を握つたのは、河竹繁俊の「河竹
黙阿弥」なる著によれば、弘化四年(一
八二七)の末頃からで、それ故に彼の地
位も他の歌舞伎立作者、三升屋二三
治、二代目並木五瓶、三代目桜田治
助、五代目鶴屋南北などと比較して
も、最も若い、かけ出し作者にすぎ
なかつた。しかも五代目南北は新七
の師である。しかし嘉永期に入るや、
いよ／＼頭角をあらわし始めてきた
のに乗じてか、門人も多くなり、こ
の頃堂山も入門したことは確かであ
る。この入門時期について、「河竹繁
俊返書」記事では、能晋輔の紋番附
の初出は「嘉永四年の顔見世よりな
れども」とある通り、

「河原崎座顔見世霜月絵本番附」に
は、

- 篠田差助 とある。この狂
- 梅沢宗六 言作者の順序書
- 山田藤次 きと、その位付
- 能晋輔 けをみると、能
- 島田安次 晋輔は狂言方六
- 柴進吉 枚目に相当する
- 川口源治 と思われ。こ
- 篠田全治 れは初出番附と
- 勝見調三 いわれるものに
- 河竹新七 して、なお彼よ

源治、進吉、安次の四人がおり、し
かも柴の姓を名乗り黙阿弥門下生と
はつきり指摘できるものとして見習
い格の進吉さえ既にいたのである。
〔河竹返書〕には「嘉永三年の交
に入門せしものと存候」と述べられ

であるが、果してこれが正しいか、
後出の資料の記録に従つて、嘉永三
年の夏頃の入門とすると、約一年半
の経過で突如として作者番附に登録
され、しかも狂言方六枚目にのし上
り、その上、己より下に四人もの下
級作者がいるという事は、なんと
奇異な感を抱かせるものがあるよ
うにも思われる。

確かに堂山は、文才、画才に恵ま
れていたことはまぎれもない事実で
ある。黙阿弥は、その点をかつて、
己が称していた河竹新七巳前の能晋
輔の号を堂山に与え、その号の使用
を了承されたのである。しかし忽然
の昇格は、なんとしても不審である
ので、過去の上演絵本番附を追求し

て、見習い格時代の証を探索すべく
努力をつづけてみたもの、現在に
至るも、すべて徒勞であつた。能晋
輔の追及は、現時点では、やはり
「昇鯉滝白旗」(嘉永四年十一月興行)
の中の二番目へえんま小兵衛二幕
三場の世話物の創作経過についての
河竹繁俊著「河竹黙阿弥」に述べら
れている堂山についての挿話の段階
で袋小路に止まってしまう。しかし
河竹返書をどこまで信頼するか、学
として、やはり調査の上、しっか
りと確認しなければならぬ責任は
今後に残される問題点である。

なかむらはらのさと 中村原郷

②

遠藤次郎

下中村の由来

今から八百数拾年前頃、中村庄司平宗平が常陸の国からやって来て村をおさめるようになったと伝える。村は、その後上中村と下中村に別れたがそれは戦国時代以前のこらしい。上中村は、明治四十一年(廿八)井ノ口村と合併して中井村と変った。下中村は、昭和三十年(五五)に前羽村と合併して橋町となったがこのような長い歴史がある。

古老の話では、奥ヶ入地区上町地区は松の太木が群生していて昼なお闇い程だったと。大塔ノ宮が落人



上町砂利採取地

となつて上町に住居したと云う。国府津から上町へ通ずる街道があつて沼代・小竹・山西・川匂へと続いた。その頃、小船・中村原は草原の沼地で上町を起点とする小川は、下河原あたりで中村川と合流して前川小学校校辺の海に流れ込んでいたとか。上町地区の伐つた松の太木は小川に堰を作つて貯め、堰を放しその水勢を利用して順に海まで運んだ話である。大正の始め頃、中井村(中井町)相原家、下中村(小田原市)の早野家が開墾してみかんを植えた。その後富農が次第にみかんを植え始めたと聞いている。近年砂利採取や宅地造成で昔の様相はない。

川狩の話

下原に来て間もなく養父は漁が好きで秋の夜は押切の浜に釣に連れて行かれた。餌をつける時、電燈を持つのが私の役であった。手作りの竿のため糸をたくう。子供等に踏まれないよう番をする。十月ともなる

と、夜は冷え込む。砂を掘つては、穴の中に入るのだがいつしか眠ってしまう。帰るんだと起される。釣れた魚を紐に通して持たされた。

中村川は、今より澄んでいた。土瓶に石油を入れ口から布を出して火をつけ篝火とする浅瀬に海老が寄つて来る。「タモ」といふ網で掬う、小バケツに半分程とれた。養父は鰻取りも名人級で、私は「ビク」を持たされた。下り鰻を三米程の待ち網でとる。高学年になつて流し針や「モジリ」を仕掛けて、朝暗い内に揚にゆく。漁が有つた時の嬉しさは、六十数年過ぎたことを昨日の様に思い出される。他に竹で造つた籐でどじょうや「ハヤ」「フナ」釣りに夢中になつたものである。

念佛講

今から二十年前に念佛講がなくなつた。私の句の「静けさや土用の月に講の鐘」を師の立木望隆先生が取り上げて下され「農協だより」に載つた。毎月二十四日には、地藏様を祀る念佛講を、老人達が楽しみに

していて、終つて茶菓が出て時を過ぎた。外に講中として、各人の家が宿となつて廻る十五日講、山の神講、稲荷講、庚申講等があつたと聞いている。

近年になつてテレビ、ゲートボール、グラウンドゴルフ等多様な娯楽が多く、運動量も多くなつたと思ふ。老人会の催しに新年会、お花見会。旅行会がある。老人の日には体育館でいろいろの催がある。しかし、近年は食生活が變つて五十年代、六十代の人々が脳梗塞、ガン、心臓病等が多発して、また、若年の痴呆とかがあり、ともかく昔のような信心が薄れている感がある。

湯場の宿

金簀のバス停の処を東へ二百米程行き、下原橋を渡つて更に二百米位進むと崖に突き当たり、少しの空地がある。かつては、ここに三階建の湯宿があり、当時、鯛が大漁で漁師の人を始め近在の人々が体を休めに来たそうである。湯宿には湯女が数人いて、酒肴が出る。ある富裕な旦那が湯女を姫ましてしまった。湯



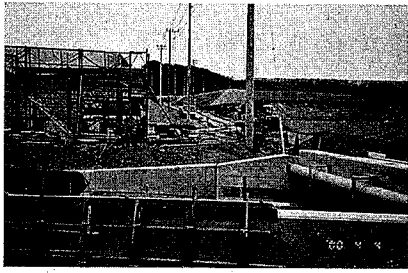
湯場の宿跡地

女は小供を産んだ。旦那は困り果てた末、赤子を押切の海に投げ捨てようかと迷つた末、浜の砂に埋めたとか。事が後で漏れて野芝居になつたと、六十数年前に聞かされた話である。

そこには、冷泉が自噴していて近在の人々が瓶等に詰めて持ち帰えつた。関東大震災で水量が半分以下になつたと聞いた。こんな話を語る人も次第にいなくなつて忘れられて行くことである。

下原心中

大正の始めの頃、建具職人が住んでいた。或る日、ついひの出来心で材木を二、三本盗んでしまった。悪いと思つているうち、材木屋の主人が駐在に訴えると言



下原の洞橋

い渡された。小心者の建具職人は、さんざん悔やんだ末、夜中に起き出て、小雨の降る中、妻とわが娘を出刃で刺し殺してしまった。二寸角ほどの木材を立て唐草を妻娘の上にさし掛けてあったという。自分は井戸に身を投げたが死に切れず、その夜、旅に出て行き行方知れず。村人は、非常に憐れんで懇ろに用ったそうである。どこの無縁墓地に埋められたのか……。八十数年ほど昔の話を語る人も少なくなってしまう。いつしか忘れられることであらう。

下原の火事

明治の始めの頃煙草の生産が盛んで昼の内に葉を掻いて、夜なべして縄目に一

枚一枚ずつ葉の茎を刺して日陰げ干しにする。つい夜遅く迄仕事をして、提燈の火を消し忘れての火事が多かったと聞いている。

「元禄さんの家、けんぶん梨の家、六月二十四日には某家の火事で数件焼けてしまったとか。また加藤家の火事は、留守居の人が灰を取って物置小屋の近くに捨てたのが物置に火が燃え移った。着火夜八時頃だった。私の家にお酒を飲みに来ていた人が見つけて、素早く火の見る鐘を鳴らしたので多勢の人が集まって手押ポンプが動いたので物置だけのボヤで済んだ。水車の家の馬小屋の火事があつたのは、私が十二、三歳の頃だった。

戦後になって一、二件の火事が有つたと聞いている。火事には充分の注意をしたいね。

中村原実行組合

昭和二十二年、私が、ソ連の収容所から帰ってから間もなくのことである。私は、中村原実行組合の役員に選ばれた。当時の組合員は、九十一戸で、組合長は、飯田栄さん、他に役員は副



少なくなった農地

の武井憲太郎、浅田宇之助、橋川政吉、橋川清蔵、私、小澤広之助、加藤誠三、多田十郎、善波斧三郎、峰尾喜三郎の皆さんであつた。終戦直後のため食糧を出さなければならず、一畑ごとの検見。供出割当、配給物資の配分などの役をしなければならず、それにたまたま自作農創設特別措置法の施行のため一筆調査が行われ、一畑ごとの一等から七等までの島の皆級の決定等で役員は多忙を極めた。組合長宅に週二度三度集まって計算をした。このためか後任が決まらず、組合を分割する事になった。各別別の案と専業と兼業農家に分ける案が出た。二、三度総会を開いて、専業と兼業とに分けて、兼業農家はその

後、第二第三とかに分かれていった。専業農家は三反以上で三十一戸。その後、農協理事が決まらず分れたままで現在に至る。

片端梅

昔むかし村人がある処で木橋の普請をしていた。そこへ赤子を背負った老婆が女の子の手を引いて通りかかった。老婆は、この橋は何度掛替えても流されてしまうと、声高々に言つた。村人は悪気が出て、その老婆と赤子を、人柱に埋めた

とさ。赤子が熟れた梅を半分程食いかけていた。その梅の種が芽を出して、やがて成木となって実を付けた。その梅の実が片端であつた。村人は祟りを恐れて、懇ろに供養したそうである。やがてある女の子が成人して隣り村にお嫁に行つた。幾日か過ぎて里帰り、仲人さんと途中の森を通りかかった。すると突然銃声がした。その時、その娘さんが普段無口であつた

と、昔話で今片端梅がどこにあるさえ忘れられていることか。

大磯銀行の倒産

私の子供の頃昭和四、五年頃(五元言)に不況が続き、大磯銀行が倒産して、当時理事をしていた富農の家では、田畑を半分も売り払って、貯金者の保護に当つた。私が知っている家でも何町歩の田畑を売る事になつたと、子供の頃聞かされた。それでも貯金者は貯金の半分程しか戻つて来なかつたようである。近年は、平成不況で信用組合始め大手銀行、証券会社、生命保険会社、大手デパート、ホテル、中小の下請工場の倒産と相次いでいる。政府も公的資金の投入等、対策に全力を尽しているが、不況改善がみられず、大手銀行の相次ぐ合併自動車工場の外資の導入等に全力を尽しています。毎日の新聞やテレビ報道されているように、日本の物資文明の総崩れの形相は、いつ迄で続くことやら一日も早い景気の回復が望まれる。(つづく)

私の青春

⑤

旧友との再会

私の小学校時代の同級生に新山甲三という友人がいた。

彼の家は小田原市万年町で鉄工場を営んでいて、建築関係の釘、カスガイ等を製造していた。

彼は出っ歯で少し吃ることがあったので、それを同級生によく口喧嘩の材料にされ、はやしたてられていた。しかし、彼生来の陽気さというか、明るい性格のためかそれを気にもせず通学していた。

中学(旧制)への進学は、彼は商業学校へ、私は中学校で進む方向が異なるため会う機会もなかった。

私が中学生となったのは、太平洋戦争が始まった年、昭和十六年であった。

真珠湾奇襲攻撃に始まる日米戦争により、我々の中学生教育も軍事教練が週何時間かあり、中学三年生の初夏には騎兵銃(三八式歩兵銃よりも短銃身)を持たされ、板妻廠舎に三泊四日の宿営をして富士裾野の原野で野外訓練をやらされた。

四日間の食料・身の回り品を背囊につめ、帯剣を吊り騎兵銃を肩に小田原から御殿場まで列車、板妻まで行軍そして、四日間の野外戦闘訓練を行った。

菅沼 博

現代の中学三年生は体格も戦前の中学生よりもよいので、背囊・小銃を持つてもサマになるだろうが、その時代の中学三年生では背囊・小銃が歩いているような格好であった。

それでも演習内容は一人前で、対抗部隊を編成して赤・白に別れ、空砲を各人に持たされ、富士裾野の原野で空砲を撃ち合いながら、傘型散開・ほふく前進・射撃・突撃と華々しく富士の裾野の演習場を駆け回った。

このような時代であったので社会の風潮も、学生の教育も、軍隊を志願しない者は人にあらずというような傾向にあった。

新聞もラジオも若い中学生の軍隊への入隊を大いに鼓吹し、それが当たり前の時代であった。この時代の流れに逆らわず、その気になってしまったのが私であった。

昭和十八年夏、中学三年生の私は、陸軍少年飛行兵の試験を受け運悪く合格してしまった。

その当時、私の中学の同級生は約百人程であったが、十人位が海軍・陸軍の少年兵の試験を受け、合格したのは私ただ一人であった。

勿論、その後戦雲急を上げる十九年末頃になると、受験者の大部分が合格して少年兵となっていた。

私が合格した時、商業学校へ行っていた新山が合格していた。私は新山が同期で入隊することになってしたのは知らなかった。

家がお互いに離れていた関係と、中学が同じでないことが原因であった。

新山と顔を合わせたのは、入隊した翌日の昭和十八年十月一日のことであった。前日の入隊する日は雨が激しく、武道館で行われた入隊前の身体検査を、何か寂しく孤独感に襲われながら受けた。

一期先輩の飛行兵に引率され、内務班に案内され一息ついたとき、他の飛行兵生徒に引率され内務班に入ってきたのが新山であった。それも同じ内務班所属であった

「新山君、君も飛行兵になったのか?」

と私が聞いた時、彼は「あれ、菅沼じゃないか。どうしてここにいるんだい」と私に聞き返してきた。

彼は自分自身と同じように、私が飛行兵生徒になったことがよく理解されなかったようであった。

しかしお互いに学生服を脱ぎ、飛行兵生徒の軍服を身につけ顔を見合わせたとき、そこに新山飛行兵生徒と菅沼飛行兵生徒が誕生していた。

二人は手を取り合って同じ内務班の生活ができることを喜び合ったのである。

日本全国から選抜された志願者の

中で、それも東京陸軍少年飛行兵学校、第十七期生千五百名の中で、同じ中隊、同じ区隊(小隊)、同じ内務班に小学校の同級生がいるということとは、本当に奇遇であり奇跡に近かった。

かくして二人の一年間の飛行兵生徒の生活が始まったのである。

二人は小学校の同級生であり、同じ内務班の関係上よく助け合った。少々茶目っ気があり、ちよっと吃る癖のある彼は、

「新山飛行兵、厠に行つてまいりませう。」

と言うとき、「新」にい、でつつかえ、「厠」かわやのかでちよつとつかえた。

口の中から吸気を吐くとき、つめ具合に発音する言葉に吃るのである。しかし、そんなにひどい吃りではなかったが、彼はそれを治すのに努力しているようであった

そのため少し抑揚をつけ、言葉が流れ出てくるように心掛けていたようであった。これが戦友達の笑いをさそっていた。また、その抑揚が彼をからかう材料になった。

しかし、彼はその笑いにも微笑で対応し、からかいを根にして機嫌を損なったり、彼本来の陽気さを失うことはなかった。

昭和十九年秋、私達は一年間の飛行兵学校の生活を終えて、それぞれ操縦・通信・整備の専門学校へ適性にに応じて別れて進むことになった。

彼「新山飛行兵」も操縦、私も操縦となり、宇都宮陸軍飛行学校へと共に入校したのである。今までの襟の青い階級章とプロペラの記章は、一般の兵と同様の赤い階級章に変わった。

しかし、階級を表す星は一つもついていなかった。相変わらず飛行兵と行っても未だ生徒であった。

ここでも私は「新山飛行兵」とは、また同じ区隊、同じ内務班であった。我々二人は本当に驚き、同じ内務班で生活できる二人の境遇を心から喜び合ったものであった。

滑空機の飛行訓練

宇都宮陸軍飛行学校の生活は東京陸軍少年飛行兵学校と同様に、午前中学科、午後実科の毎日であったが、変わったことといえば、今まで午後には歩兵の基本となる訓練の連続であったが、これとは異なり、雨か風の強い日を除いて、毎日午後は滑空機の飛行訓練であった。

初めは地上滑走から始まり、ジャンプ・三米・五米とだんだん滑空高度を上げてゆき、五カ月後の昭和二十年二月には一人前のグライダー滑空士が出来上がったのである。

あとは赤トンボと言われる初級練習機による飛行訓練が転属先で待ち受けている筈であった。

宇都宮陸軍飛行学校は宇都宮駅の東方五〜六キの鬼怒川を渡った左手の小高い丘の上にあった。

敵機来襲

我々飛行兵生徒は飛行場の片隅で毎日毎日グライダー訓練に明け暮れていた頃、確か昭和十九年も暮れに近い頃だったと思う。

或る日の朝方、突然空襲警報が発令された。

この警報が発令されたのは、朝食後の内務班にいる時であった。我々は銃架から小銃(九九式小銃)を取り、舍前に整列すると同時に所定の場所に駆け足で向かった。

所定の場所とは、飛行場の滑走路に近く添って作られたタコツボ壕である。

その位置は飛行機の離陸待機位置に最も近く、また格納庫にも近い位置にあり、敵機が飛行場に突っ込んで来たときには、ほぼ敵機と正対するような場所であった。

このような場所で敵機と正対しながら射撃することを「刺し違え射撃」と称して教育され訓練された。

正対する敵機に対する射撃は距離のみ考えて射撃すれば、弾丸は命中する筈である。

我々少年兵には難しい横行する敵機を撃つような場所即ち、滑走路や格納庫、飛行機等の攻撃される目標物から離れた安全な場所は与えられなかった。

弾丸を空中に発射すれば、敵機に当たらない限り空気抵抗により速力が落ちてくると共に重量によりだん

だんと下がり、最後は地上に落ちてしまう。

自分に向かって来る敵機は、見掛の大きさのみが段々と大きくなり、上下左右には動かない。しからば、これに向かって弾丸を発射したとすれば、弾丸の敵機に届く迄の間に、どれだけ弾丸が下がるかを考えればよい。

これを瞬時に決断し射撃すれば、弾丸は敵機に必ず命中する。しかし、敵機も射撃しているので弾丸はお互いに命中することになる。これを「刺し違え射撃」と称した。

要するに、食うか食われるか、やるかやられるか、決死の覚悟というものが必要であった。

どのくらい待ったであろうか。近くに四式銃爆撃機(キ六七)が駐機していた。その周辺には何人かの整備兵と思われる兵達が空襲警報のため右往左往していた。

タコツボの私には彼等整備兵達が何をしているのか解らなかったが、朝の日差しが斜めに降りそそぎ、空は青く晴れあがっていた。

いつも飛んでいる味方の飛行機も、このときは爆音も聞こえなかった。周囲は静かだった。

私はキ六七の美しい葉巻型の銃爆撃機を対空監視の合間にチラリ、チラリと盗み見していた。宙返りも出来るといわれたその銃爆撃機は、一〇〇式銃爆撃機(呑龍)とくらべて、ずっと洗練されスマートな姿をして

いた。

青空を見上げて敵機を捜し疲れた目を、ちょっと動かし、四式重爆の整備兵達は何をしているのかなと目を向けた時であった。

美しいだいたい色の雨が斜めに四式重爆に向かって降り注いでいた。初めて目にする光景で一瞬、何が始まったのかなと思った。

これは敵機グラマン戦闘機の機銃掃射の曳光弾であった。同時に「グオン」と敵機の急降下の爆音が聞こえてきた。

区隊長(小隊長)は如何に、と見ると、タコツボの上に軍刀のみを突き出して何か叫んでいるようであった。

「撃て」とても叫んでいたのである。軍刀の動きで判断するより方法はなかった。

周囲は対空射撃音で急に一杯となった。

敵機は濃緑色のズングリした虹のような形をしたグラマン戦闘機であった。

四式重爆の真上数十米を横切るグラマン一機の風防の中の操縦士が、背中をまるめ加減にした格好まではつきり見えた。

私は射撃準備をしていた小銃で頭上近くを通り過ぎる敵機の手近なやつに、後ろから追うような形で射撃していた。

朝の太陽を背に巧妙に突っ込んできた敵機に我々は奇襲されたような

形となつてしまつた。

太陽の方に顔を向けて少しの瞬間は見張ることが出来るが、丁寧に出来ない。しかもそれが太陽の輝きの中であつたら、裸眼では不可能であらう。

敵機はそれを巧みに利用したのである。しかも彼等は全速力で襲い掛かった。爆音が聞こえた時はもう掃射されていた。

我々は機を引き上げてゆく後から射撃するようなことになつてしまつていた。

格納庫前に据えられた高射機関銃は、絶え間なく射撃音をさせていた。

七、八機のグラマンが飛行場滑走路に沿つて一航過したが、一機も撃墜することは出来なかつた。

地上の飛行機を銃撃して去つた敵機は、我々の視界の見える所で反転すると、今度は西の方向から二航過目の地上掃射にやつて来るのが見える。

今度は太陽が我々の背後にあつた。それで目標の敵機は、はっきりと初めから視認できた。

追つて来る敵機を小銃で射撃するため、肩付け、頬付けをして待つた。指で引き鉄にあて、有効射程三百米になつたら射撃しようと心に決めていた。

迫り来る敵機は、私から見て若干軸線がずれていた。その機首は左側にある格納庫に向いていた。完全の刺し違え射撃が出来る敵機と正対す

る機会は数少ないものである。

軸線が若干ずれているな、と思つて銃を構えていた。

五百米、六百米離れていた。視界の中にある数機のグラマンの両翼から、突如銃弾の発射光が見えた。

だいたい色の火筋が乾いた大地に大粒の夕立ちを思わせるような音をたて始めた。

激しい夕立ちの降り始めのようなボコツ、ボコツという音を身近に耳にした瞬間、首がスツとタコツボの中に引つ込んでしまつた。

恐ろしいとか、命が惜しいとかの考えは無かつた。本能的に身体が動いてしまつた。

目にごみが入る瞬間に瞬きをすれば、あの感覚であつた。

正対して生死を超越して刺し違え射撃に専念することが出来れば、敵を撃ち落とす事は出来なくとも、あの程度の傷を負わせることは出来たかもしれない。

今思い出しても私を含め戦友達も、完全な基本に従つた射撃は出来なかつたのではなからうか。

周囲に夕立ちの降り始めのようなボコツ、ボコツと激しい音をたてて撃たれている時が、刺し違え射撃の射撃のチャンスであつた筈である。

実際はこの撃たれている時、タコツボの中の壁にピツタリと身を寄せ、空を見上げていた。

タコツボから見上げる丸い空間に敵機が横切るその瞬間、撃ち上げて

いたのである。

横行する飛行機に対する射撃は距離、敵機の速力、方位角度等を瞬時に考へて射撃しなければならぬ。撃ち落とせないのが道理というものであらう。

敵戦闘機の横腹が見えるようになると、ボコツ、ボコツという着弾音はしなくなつていった。

私は身を乗り出し当たらない弾丸を撃ち上げていた。

区隊長の軍刀は相変わらずタコツボの上に突き出て揺れ動いていた。鉄帽が見えないので中にしゃがみ込んでいるに違ひなかつた。

彼は九州の出身で私立大学を出た予備見習士官で、我々を教育する時によく口にする言葉は

「俺は九州の阿蘇山の外輪山で坐禅を組み、精神修養をしたものだ」と言うのが口癖であつた。

立派な事を言う割に行動が伴わない臆病な見習士官であつた。我々は彼の事を外輪山に因んで「ガリン山見習士官」と呼んでいた。

二航過目の最後尾機は五十キ爆弾と思われものを格納庫に落とすた。

「ガーン」と爆発音が響いて爆煙が上がつた。

ついに一機も火を噴くのを見なかつたし、グラリとする敵機も見なかつた。

敵機グラマンは全機無事に二航過の地上銃撃を終えて朝日の昇る方向

へ去つて行つた。

三十秒もしない内に、敵機の爆音は聞こえなくなり、静寂が蘇つて来た。

この空襲は、ほんの二、三分のアツという間に終わつてしまつた。

私はホツとしてタコツボから周囲を見回した。最初に臆病な区隊長はどうしているかなと、彼の方を見ると、タコツボの上に彼の鉄帽が見え隠れしていった。

私の戦友の「新山飛行兵」も少し離れたタコツボで対空射撃後の銃の手入れに専念しているようであつた。

ホツとして、どれ程の時間が過ぎたであらうか。

その時、また飛行機の爆音が聞こえ始めた。

今度の爆音は、グラマンとは少々異なつていた。その爆音は金属性の音色であつた。

私にはその爆音は日夜聞き慣れていた三式戦闘機(飛燕)だと直ぐに解つた。三式戦の発動機は水冷のため空冷のエンジン音とは異なつていた。

飛燕の一個中隊九機は編隊を組み高度五、六百米で南の方から姿を現した。

グラマンが去つて行つた方向にや近い方角であつたが、敵機が過ぎ去つてから五分もたつていないと思われた。

私は上空を見上げ、今の空襲の時、

この戦闘機は何をしていたのかと思っていた、その時であった。

近くのタコツボから「ダン」と小銃の発射音が聞こえた。格納庫前の高射機関銃も猛烈に撃ち上げ始めた。

我が区隊長は爆音が聞こえた時には、タコツボにしゃがみこんでいるに違いなかった。

軍刀のみがタコツボの上に突き出て揺れていた。彼の鉄帽は見えなかった。

再び「ダン」と発射音がした。「味方の三式戦だ」

私の周囲の者達が叫んでいた。しかし、爆音と高射機関銃の発射音が入り乱れ、射撃をしている者の耳には入らないらしい。

その間にも小銃の発射音は何発も私の耳に聞こえていた。高射機関銃はとにかくとして、小銃の射撃を止めさせなければならなかった。

私は叫んでいた。

三式戦の編隊が頭上を過ぎる頃、ようやく機関銃の発射音は聞こえなくなった。同時に小銃の発射音もやんだ。

味方の戦闘機と気が付いたらしい。区隊長の軍刀が見えなくなり、顔がタコツボの上に見える。

三式戦闘機は米軍のP51に似ていた。それで間違えたのかもしれない。しかし、翼には日の丸がはっきりと見え、しかも編隊を組み速度を落としていた。これを射撃した高

射機関銃手と小銃手は大馬鹿野郎であった。

頭上を過ぎた三式戦の編隊は何事もなかったように西の方から一機づつ順序よく宇都宮の飛行場に着陸した。

空襲警報が解除され、営内に帰ってからの大変なことであった。三式戦の編隊に対して発砲した者の詮議が厳しく行われた。

小銃の発砲者は幾人もいた筈であった。私が聞いた射撃音は一人や二人ではなかった。特に高射機関銃は連続して射撃をしていた。しかも、機関銃班は下士官で編成された我々の上官達であった。

厳しい詮議に対して誰であろうことか、名乗り出たのは新山飛行兵であった。しかも我が中隊でただ一人であった。

銃声は確か一人のみではなかった筈である。格納庫前の高射機関銃は激しく撃ち上げていた。

彼は発砲者数人の中の一人の犠牲者となった。

呼び出された彼が内務班に帰って来たとき、彼の顔はぶざまに変形し、目はつぶれたようになり、口からは血をふき出していた。

数日の間、食事も満足に食べられないほど殴りとばされていた。

辛いことは、三式戦は無事であり、射撃しなかったことでは、それ以上に追求がなかったことである。あの区隊長の空襲中の態度とい

い、高射機関銃の発砲といい、新山飛行兵一人を責めるのは酷というものであろう。

私はすべてが終わってから、新山の顔を濡れ手拭で冷やしてなりながら聞いた。

「どうして味方の飛行機を撃ったんだ？」

「区隊長は(撃て!)と叫んでいたし、翼の日の丸が目に入らなかったんだ」

ただ彼は答えた。

彼のタコツボは区隊長の近くに位置していた。

何週間か過ぎてから、彼はそのときの事を面白可笑しく営内でしゃべっていた。

「五発の弾込めしてあった弾丸を全部撃ってしまったんだ、区隊長が

それでも未だ「撃て!」と叫んでいたよ。よっぽどグラマンの機銃掃射が怖くてずーっと頭を下げっぱなしだったんじゃないかなあ」

「それにしても下手な射撃だったなあ、一発も当たらなかったなんて」

戦友の間では、ちよっと吃る癖のある彼をからかいながら話が弾んでいた。

小学校同級生で志願兵となってからも同じ内務班で過ごした例は数少ない筈である。転属したときも別れず一年半にもわたって、同じ内務班で過ごした彼のことが思い出される。

戦後になってからも会う機会ごとくに、彼の失敗を話の種にしたものであった。すでに遠い半世紀前の昔の事である。(つづく)

会員消息

◎さる四月、小暮久子さん(南足柄市塚原五五)は、総合女性史研究「第十七号に「近世における女性の関所通行」主として箱根山之内村々の女性の関所通行」を発表された。

◎小野意雄氏(小田原市中町二一六)は、去る五月発行の『日本都市学会年報』に「城下町都市の個性化：CIからみた城跡空間「小田原」をケースとし：都市の中心性・象徴系「共生核」と循環系の「結節極」を發表された。

◎小林謙光氏(小田原市堀之内二五)は、この度「富士信仰研究」創刊号(埼玉県鳩ヶ谷市南一五五 岡田博方富士信仰研究会刊)に「武州丸岩講と相州丸岩講」を執筆された。

◎武田敏治氏(小田原市栄町一〇七)は、この度『孫たちへの証言』第13集に「小田原空襲とその遺産」を執筆された。この本は大阪の新風書房が、戦争体験を風化させてはならぬと毎年8月に発行するもので、本年度で13冊目になる。

富士信仰研究

創刊号

編集者	小林謙光
発行所	新風書房
発行年	2000年
発行月	8月
発行日	8月10日
発行部数	1,000部
定価	1,000円
送料	別
代金	別
振込先	新風書房
振込元	新風書房
振込額	1,000円
振込日	8月10日
振込時	8月10日
振込先	新風書房
振込元	新風書房
振込額	1,000円
振込日	8月10日
振込時	8月10日

画家 岡本秋暉の父政美

中野敬次郎先生著『小田原近代百年史』の「岡本隆徳の生涯」について、岡本家四代が記されている。

蘭医祐仙、金彫家政美、画家秋暉、書道家碧巖と、岡本家四代が、何れも父祖の職業を継がないで各々別の職で皆大家になったのは面白いことであるが、これは祐仙の考えて、子供には父の職業をつがせない、子供は父の職業は、小さい時から父の側において、見よう見まねで一かどの事を覚え

てしまうから、困苦修行をして技を磨く機会を失ってしまうことが多い故に、その道の大家にはなれないことが多い。それ故、父と違った職業に入れて、他人の門で小さい年頃から修行させなければならぬれないそうで、これが家訓となつて、続いて違つた道で達人となつたのであるから面白いのである。

牛の頬

遠藤治郎

牛の頬かるく打ちなり大旦おおあした
大寒の牛のふぐりの湯気淡き
牛の鼻塗れてたのしはるの雪
搾乳や声のとぎれて夜の蟬
初時雨牛の動きの静かにて

で美術にも詳しい畏友の杉山俊次郎君より、政美に関する史料を提供していただいたので、ここに紹介しよう。

であるが、父や祖父ほど著名でない。大阪万博で「太陽の塔」を制作した人とは同名異人。

政美は通称を庄蔵といひ、後藤一乗、二代目浜野矩随、江川利政等と同時代に活躍した大月光與より八年、河野春明より十四年程前に生まれている。始め佐野直好に学び、後に石黒政常の門に移っている。それ故、石黒派の三代目を継承した。住んだ所は、芝源助町とも芝口露月町とも記録が残っている。どちらにしても芝口である。或いは、住まいを移したので二箇所

晩年、島津侯の抱え工となつたと云われるが確証はない。ともかく多くの門人を養成して、名実共に石黒派の実力者として幕末動乱の中に一生を終っている。ところが、これだけの業績を残しながら生没年月日がハッキリしないし、勿論、戒名や埋葬地も分っていない。ただ、八十七、八歳までは生きていたとか、万延元年(一八六〇)か文久元年(一八六〇)頃には亡くなって居たという話が残っている。

画家岡本秋暉の父政美が金彫家であつたという以外のことは分からなかつた。ところが近頃、刀剣研究家

そこで政美の生没年月日を調べてみよう。しかし、昔のこと故、数え年であるので、一応、満八十七歳で没したこととして計算してみた。

- ① 生まれた年が明和元年(一七六四)説がある。これによると嘉永五年(一八五三)頃の没となる。
- ② 江戸金工の河野春秋は、天明七年(一七九七)生まれで安政四年(一八三三)七十一歳で没している。政美が河野より十四年前に生まれたとする話があり、これに従えば、安永二年(一八〇三)頃の生まれで、万延元年(一八六〇)頃の没となる。
- ③ 京都金工の大月光與の生まれは明和三年(一七六六)、天保五年(一八三四)六拾九歳で亡くなっている。政美が大月より八年前に生まれたとすると、政美は宝暦八年(一七八八)の生まれで、没年は弘化二年(一八四〇)頃となる。
- ④ 万延元年(一八六〇)に亡くなつたとする説(変らない)

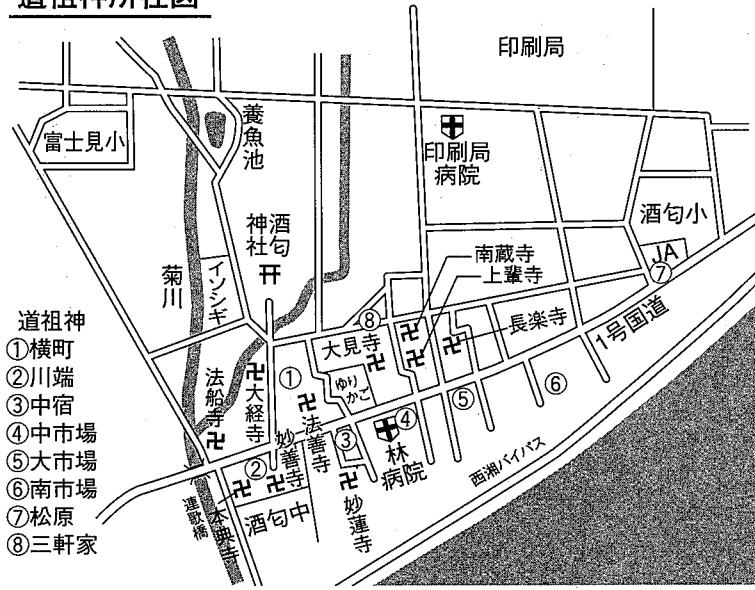
以上のように生没年月日は明らかでないが、幕末のころ力いっぱい生き抜いたのであろう。

提供を受けた史料「金工鐔寄」「日本装剣金工史」「江都金工譜」若松泡沫「鐔小道具入門」(岡部忠夫)

註 岡本太郎は、洋画家で小田原市早川に住み、好んで海の絵を描いたよう



道祖神所在図



- 道祖神
 ①横町
 ②川端
 ③中宿
 ④中市場
 ⑤大市場
 ⑥南市場
 ⑦松原
 ⑧三軒家

酒匂史談

⑤

川瀬速雄

五 小字と集落の通称

前号で酒匂の小字を挙げ、北中と免耕地を範囲とする三軒屋は、古来からの字でない」と記した。

三軒屋は、江戸末期から

明治初頭、久野中宿より杉崎氏と鈴木氏二軒が、一面の桑畑の中に移り住んだので三軒屋と呼ばれるようになった。古来からの字ではない。

なお、酒匂の道祖神で不思議に思うのは、小八幡や中里などのように古い石碑

六 酒匂川

や双体像のものでなく、明治中期以降のものばかりである。古い歴史を持つ酒匂の道祖神としては合点がゆかない。なにか理由が有るのだろう(道祖神の所在を示した表を参考までに掲げた)。

酒匂川は富士の峯の麓より湧出し、御厨(御殿場)小山、山北、松田より足柄

平野を南下し、酒匂村の西にて海に注いでいる。その幹流は、ほぼ十三里十九町余(約五四km余)。川幅は、連歌橋より網一色埋橋間で五町二十間(約五七〇m余)。川の中間を酒匂・網一色村(現 小田原市)の境界をなしている。足柄平野の母なる川であり、また、暴れ川でもあった。

酒匂の史談は、この川なしては語れない。

道祖神			納められている墓輪数					
場所	形体	年号	空輪	天輪	火輪	水輪	地輪	その他
横町	自然石	明治20年1月	1	5	7	7		
川端	〃	明治28年10月	1	1		3		
中宿	〃	明治28年1月	1	3		3		
中市場	〃	文字風化	段付 2/2	4	1	11	1	1
大市場	〃	明治26年2月	6	7		8	2	1
南市場	〃	年号ナシ	11	2段 2/4	1	12	5	3
松原	加工石	〃						1
三軒家	〃	〃						1

昭和40年(1965)調査

1 酒匂川の記録
 以下、酒匂川にまつわる中世の主な記録を挙げてみよう。

- i 菅原孝標の娘が、寛仁四年(1010)、足柄山を越えて京に帰る紀行文に「道は順なれども宿を逆川と云う所に泊まる。汐のさす時、水の上さまに流るればさかわという」とある。
- ii 治承四年(1134)八月、石橋山の合戦に三浦一族が頼朝の陣に加わろうとしたとき、酒匂川が洪水で加勢を阻まれた。
 (『吾妻鏡』)『源平盛衰記』
- iii 寿永二年(1183)佐々木高綱、木曾義仲追討の時、酒匂川において頼朝の愛馬生唆を給った。
 (『吾妻鏡』)
- iv 元暦元年(1184)三月、平重衡捕らわれて鎌倉に下向の時、「足柄の山打越えて、小餘綾の森、鞠子河、小磯大磯の浦々、やつまと、砥上ヶ原、御が崎」をも打過ぎて…(以下省略)
 (『平家物語』)
- v ① 建久二年(1191)曾我十郎祐成、酒匂宿を徘徊
 (『曾我物語』)
- ② 建久三年の春、曾我兄弟、工藤祐経の郎党八幡七郎等と闘い五郎時致、七郎をたおす。
 (前掲書)
- vi 建治二年(1131)藤原為家の後家阿仏尼が、訴訟のため鎌倉に下向したとき「……丸子川という河を、いと暗くてたどり渡る今宵は酒匂といふ所にとどまる」
 (『十六夜日記』)
- vii 永祿四年(1563)三月、

上杉輝虎(謙信)、酒匂川を渡って小田原の北条氏を攻めたが、守りが固く攻略できず、後方が心配になって兵をもどした。(相州文書) viii 永禄十二年(二五九)八月、武田勢、酒匂を越え小田原へ攻め入る。

〔甲陽軍艦〕

ix 天正十八年(二五〇)三月、秀吉山中城を巡見後、家康と戦略会議を開くにあたり、その場を小田原近くの酒匂の宿河原に陣をおいた。(大三川志)等

x 天正十八年、秀吉小田原北条氏攻略後、酒匂川を渡って奥州に赴く。

〔古戦録〕等

以上は『新編相模国風土記稿』、『皇国地誌残稿』、『小田原市史』などにも掲載されているが、次に酒匂川に直接関連のある句をあげてみよう。

まり子川又渡る瀬やかえり足 道興

鞠子川又いたる瀬や帰り足 宗祇

同工異曲の句である。

神の旅酒匂は橋と

なりにけり 其角

五月雨や酒匂でくさる 初茄子 其角

雪消えて数添ふ音やまり子川 紀迪

ありありと啼けよ鞠子の沓千鳥 由古

苗代に次わけ行や酒匂川 故道

鮎釣や河原の広き酒匂川 杜柴

氷とけて沓入するやまりこ川 宣安

2 川越えの沿革

酒匂の歴史をみると、酒匂川なくしては、村の存在が考えられないほどに、大きな影響を与えている。

このことを記す古文書名は、既に本誌の一八〇、一八二号の「郷名」酒匂で古代・中世の書名を挙げていたので、以下小田原北条氏時代に続いて近世の江戸時代について考えてみよう。

(1) 小田原北条氏時代

酒匂本郷小代官が百姓等

に与えた文書(小嶋家文書)がある。

男ノ内当郷に可残者は七十より上の極老、定使、十五より内の童子役夫、此外者悉可立事船方馬衆十三人、河越船方四人可残置事

この制度は、小田原北条氏が住民に動員令を下すときの一節であるが、川越に留意していたことが分かる。

川越という重要な役が与られていた酒匂村・網一色村・山王原村の三か村は、古来から諸役を免除されていた。

(2) 江戸時代

最初に東町にお住まいで郷土の歴史を深く掘りさげられている石井啓文氏は、先般『山王原・網一色村誌』の労作を著されたが、ご自身が解説された古文書の『有信会文書』と『糸山家文書』が収録され、その中に酒匂川の川越についての史料が載っていて、参考となるものが多く非常に有り難く、誌上をかりてお礼を申し上げたい。

徳川幕府の交通政策は、五街道をはじめ諸街道を整備し、一里塚を設け、河川の架橋、渡舟など交通の安全利便を計った。

因みに、馬入川(相模川)、六郷川(川崎市)の大河についてみると、この二つの川は渡舟であったが、酒匂川のみ徒渉越となったのは稲葉正則の延宝二年(一七二五)からである。架橋の技術の未熟、軍事政策上などを考慮に入れたもので、暴れ川の酒匂川では渡舟すら難しい時があり、徒渉制となった。小田原藩では旅人の安全を計るため自由川越えの禁止規定があった。その規定は、川会所の設定、係の村、人足の数、賃金、その他細部まで指示されていた。

なお、江戸時代に入ってから三村が伝馬役免除の指示を受けたのは、酒匂村は元和三年(一六二七)に、網一色・山王原両村は元和六年(一六三〇)である。

① 川会所

高札場も向かいにあり、間口七間、奥行四間。川越の事を司る者は、名主一名・組頭二名・川頭二名・岡居

役二名・小頭四名五組の者は、毎日川会所出て、その指揮をした。対岸の網一色村にも川会所が置かれた。天保(慶応)二(一八六一)當時の川役は、名主の川辺段右衛門、鈴木新左衛門。組頭の林沢右衛門、山崎助右衛門、川瀬小四郎。川頭の小嶋半十郎、小嶋伝助。岡居役の川瀬清左衛門、川瀬庄右衛門であった。

② 川越場

『風土記稿』に、「川越場は酒匂川にあり、東海道の係れる所なり。当村及び対岸の網一色村、山王原村にて歩行人夫を出し其役を勤む」とある。

『有信会文書』の「酒匂川旧記」によると、川越場は川除堤尻の下手にあるが、出水で留川後の川明きに瀬向きが変わり川越場を決めるのが難しいときは、東西の役人が立会いの上、上下五十間ずつ計百間を越場と定める、とある。(つづく)



言葉の壁

南里 哲

シンガポールに家内と娘の三人で出かけたときのことである。

前日に泊まったオーチャード通りのホテル内に店を構えた観光タクシーで島内を一巡りしてみた。車は豪華で頑丈な形のベンツである。車の番号は888888と縁起の良い五桁の数字が並んでいる。運転手は、ヤオハンがオープンしたときにシンガポールの大臣が餉パンを買いにきたと、我々の気持をくすぐった。勿論、戦争中、日本軍の残虐行為は話さなかった。キングズ・イングリッシュでゆつくり話すので、意味が良く分かった。シンガポールは、中国系、マレー系、インド系など人種の複合国家で、

公用語に英語が使われているが、文化の中心の基盤は中国にある、とちよつぱり中国系としての自負を見せたが嫌味に聞こえなかった。

※

旅行で限られた時間を有効に活かすには、少々たかくてもバスよりタクシーの都合がよい。

昨日、見損なつた植物園と対岸のセントーサ島を見学する予定である。昨日利用した車は出払っている。ホテル前に立っているとハイヤーが、ピタツと止

まった。

乗るやいなや、運転手は、「マナー マナー フレンド」

と云うではないか……。これは、酷い車を選んだものだ。

「お金 お金 友よ」
酷く吹っ掛けられ、ボラれるのではないかとんだハイヤーに出会つたものだ。車も昨日に較べるとボロボロだ。仕方なしに覚悟をきめた。

再び
「マナー マナー フレンド」

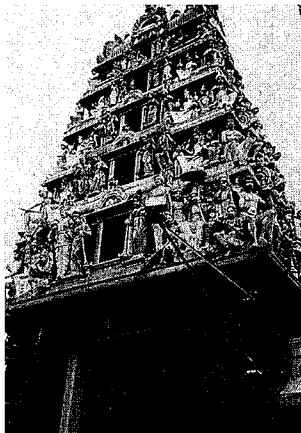
と云う。しかし、今度は、何枚かの名刺を出しながら云うではないか。よく見ると日本人の名刺である。

すぐ合点した。日本人を大勢乗せいる。信用してくれ

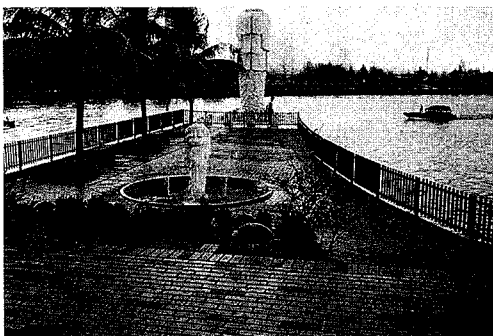
と云う意味だったのである。ところが耳が確かな家内も娘も私と同じように

「お金 お金 友よ」

と受けとめていたのである。



ヒンズー寺院



マライオン像

「フォー ツウ ザ シンガポール ボタニカル ガーデン」
と娘が運転手に云うと、「安くするから、この車で島内を観光しなさい」と、怪しげな日本語で盛んに勧めるのであった。運転手はマレー系のように

を感じてであった。おそらく、妻や子供が父の一日の稼ぎを待ち構えているのである。出来ることならば続けて乗ってやりたかったが、昨日、島内は見えてしまっている。二度と同じ場所を廻る余裕はない。丁寧に断るように娘に告げた。

箱根口(箱根八里の起点)

左手 小田原市南町一丁目



丹沢の植物

④

城川四郎きがわしろう

丹沢と箱根は地理的にそんなに遠く離れていない。狭い神奈川県西部にあって、酒匂川を隔てて南北に對置しているだけの距離である。当然、両方に共通して生育している植物がたくさんある。しかし、箱根には分布しているが丹沢には見つからない植物たちがある一方では、丹沢では普通の植物なのに箱根では見られない植物たちがある。

今回ご紹介するシコクハタザオもその典型的な植物の例になる。丹沢では沢の近くの岩場などにごく普通に見られる植物であるが、

箱根には分布しないようである。ある植物が分布するというのは、見つけさえすれば断言できる。しかし、分布しないと断言するのは非常に難しい。見落としていたかもしれないからである。シコクハタザオの場合、松浦茂寿先生の箱根植物目録にはイワハタザオという名前前で、シコクハタザオと考えられる植物の記録がある。目録には他の文献を引用された部分もあるので確認されぬまま目録に載ることもあり得るが、とにかく一度、記録されているの分布なしとは断言しにく

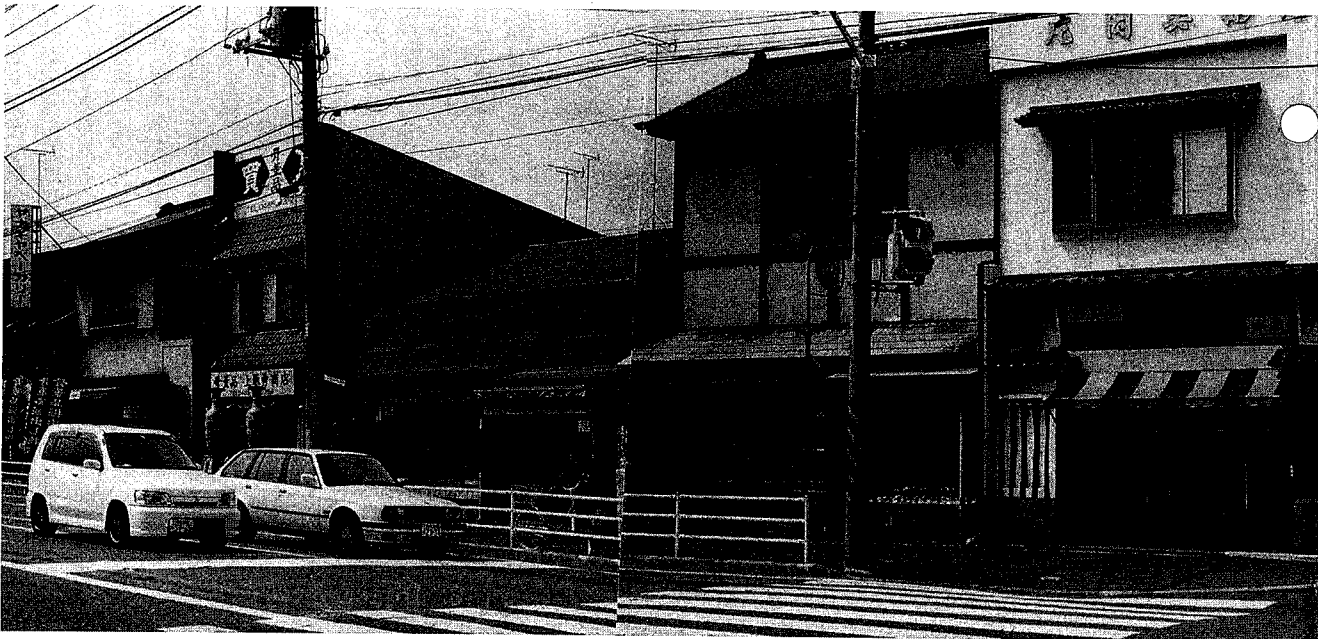
い。ただ、この二十年間の植物調査では、箱根からのシコクハタザオの標本は一点もないということから、恐らく箱根にはシコクハタザオの分布はないと結論せざるを得ないのが実情である。シコクハタザオは九州、四国、東海道を經て、丹沢まで分布しているが、近縁種のフジハタザオやイワハタザオとの区別がむずかしい、古い文献では混乱している場合が多い。神奈川県には丹沢周辺にシコクハタザオだけが分布している。根生葉の葉柄が長いのが近縁種との主な区別点になる。春、白い花を開き、初夏にはもう長い果実を傾けてなびかせている。

(つづく)

シコクハタザオ (あぶらな科)
Arabis serrata var. *shikokiana*



筆者原図



古文書講座 32

近世江戸文学を読む

：紀行、木版本の読み方：

内田 清

◆『箱根之日記』まず変体仮名を
今回は古文書解読力をつけるため
に、江戸時代の書籍を読むことが有
効だと言う事例を挙げてみたい。

写真版1は、結城光昭『箱根之日
記』の道了権現参詣紀行文の一部で
ある。解読文は文中の変体仮名を元
になった漢字で書いたり、誤字もそ
のまま書いたりして、読み仮名や正
字を、ルビの形で現代表記した。

変体仮名解読力は、手紙や和歌・
俳句・日記類を読むために不可欠の
技能であるが、読むだけではなかな
か身に着かない。運筆を確認しなが
ら筆写するのが早道だ。筆写の手本
としては、『箱根之日記』のように身
近な事が書かれていて、細い字で運
筆が明瞭に解る木版本が良い。

元字を確認しながら文書を筆写す
れば変体仮名の用法も、濁点の省略
や合字例なども身に着いてくる。筆
写すれば粗筋も歴史的な内容もより
正確に把握されて、解釈も深まる。

◆『箱根之日記』の道了権現参詣道
写真版1の部分の粗筋は次のよう
になるか。

小田原で家に手紙を出し、寺町
には桐長桐(尾上)の桐座があつ

た。多古村では五(玉)宝寺に五
百羅漢が、右側に藩の仕置場(刑
場)があった。

塚原で休憩し、酒勾(匂)川の
上流甲斐(狩)川を渡る。岸沿い
に行つて(花下)橋を渡り、加
(狩)野村の極楽寺に着いた。(極
楽寺とは珍しい)と言う和歌。坂
を登つて道了権現参詣道三丁目
(御代官前)に出た。

(一)内の文字は現在の用字で補つ
た。地名などの固有名詞は聞き書き
から来る誤記が目立つ、これは紀行
文を読む時、特に留意したい。

歴史的には、小田原桐座の座元桐
尾上を江戸桐座の座元桐長桐とし
たのは早とちりの誤りであろう。

小田原へ行く旅の途、多古村に五宝寺あり
桐長きり可名前也。是より志者し
田道越行。多古村といふ。右盤小田原の仕置場あり。穴部
山五宝禅寺といふ。塚原奈といふ村を過、爰尔天休らひ、甲斐河越
塚原奈といふ村を過、爰尔天休らひ、甲斐河越
王多る。是盤酒勾の上奈りと云。岸尔そふて橋を
渡り、(狩野)加野の極楽寺至る。

坂を登れ盤、道了権現の山の入口三町めといふ処也。

寺の名の誤りから五百羅漢には参
詣しなかつたらしいが、藩の処刑場
は甲州道から見えたと考えられる。

また、道了権現参詣道では、著者
が禁止されていた野道を嘉永六年
(一八五三)六月に通過しているこ
とを注目したい。彼は公認の甲州道
の宿場関本村から飯沢村、参道一丁
目を通過しなかつただけでなく、写
真版で省略した、続きの部分まで読
むと、塚原村・狩野村經由の近道を
往復した上に、塚原村に宿泊してい
る。塚原の茶店から案内人が付いた
と推定され、塚原が宿場機能を備え
つつあることを読み取れる。

◆『奥の細道』芭蕉自筆本
写真版2は芭蕉自筆本とされる九
七年岩波書店刊『奥の細道』から
「実方塚」の部分を探った。自筆本
や詩歌の草稿は、この程度に難しく、
変体仮名の初歩の力では歯が立たな
い。しかし

この本は、解読文と芭蕉の推敲・創
作過程を捉えやすい補注がついてい
るし、『奥の細道』の研究書は多種あ
るので俳借文学入門書、変体仮名学
習テキストに適している。

まず字句について見ると、名取郡
を(笠嶋郡)にし、はるか左を(右)
に書き、道祖神に(岨・いしやま、
けわしい山道)を用いたのは誤解・
誤字である。(を・登・盤)が二字に
見えるほど伸びたり、(五月雨ニ)や
(よそながら)が詰まったり、を
落したりしているのは芭蕉の個人
的な癖である。

また(三)を加筆したり、書いた
狂歌部分に貼紙をして、さらに(み
のハ……婦連多りと)と加筆・推敲
したりしている様子が読み取れる。

◆『奥の細道』実方塚の謎

写真版2を歴史・文学的に読むと、
左近衛中将から陸奥守に左遷され、

▼解読文1

小田原(て)天都路(が)可家(る)音信(に)志天(して)、寺町(へ)行(は)芝居
あり。桐座(を)といふ。桐長(きり)可名前(も)也。是(より)志者(し)
田道(を)越(こ)行(く)。多古村(を)といふ。右(は)盤(は)小田原(の)仕置場(あり)。穴部
山(玉)五宝(を)禅寺(を)といふ。塚原(を)奈(を)といふ村(を)を過(す)、爰(こ)尔(を)天(を)休(を)らひ、甲斐(を)河(を)越(す)
塚原(を)奈(を)といふ村(を)を過(す)、爰(こ)尔(を)天(を)休(を)らひ、甲斐(を)河(を)越(す)
王(を)多(を)る。是(は)盤(を)酒(を)勾(を)の上(を)奈(を)りと云(ふ)。岸(を)尔(を)そ(を)ふ(を)て(を)橋(を)
渡(を)り、(狩野)加野(の)極楽寺(に)至(を)る。

▲写真版1

左(を)滴(を)く(の)地(を)こ(く)見(を)多(を)れ(を)バ(を)介(を)し(も)楚(せ)
め(を)づ(を)ら(を)しく(を)聞(を)く(極)楽寺(を)可(か)南(な)
坂(を)を(を)登(を)れ(を)盤(を)、道(を)了(を)権(を)現(を)の(を)山(を)の(を)入(を)口(を)三(を)町(を)め(を)とい(を)ふ(を)処(を)也(を)。

南足柄にも所縁ありと伝承される三十六歌仙の一人藤原実方の塚への芭蕉の混乱した対応が面白い。

芭蕉は名取郡に入ると、西行が朽もせぬ その名ばかりをとどめ置きて 枯野の薄 形見とぞ見る 『山家集』

と歌った実方塚を人に尋ねた。「一里ほど左の山根の村に神罰を下した道祖神の社と形見のススキがある」と教えられた。でも、このところ(二日間)五月雨道で疲れたので遠くから眺めて通り過ぎた。だが箕輪・笠島の地方が五月雨に縁があつて面白いので一句残す。

笠島は 何処五月の ぬかり道
これが一応の読解だが、私なりの解釈を加えると次のようになる。
45歳の芭蕉は、疲労していたといえ、実方塚を確認しなかった言い訳に、「何処もぬかり道だ」というこ

の句を残したと考える。

それは第一に、貼紙の下に、曾良あての次の狂歌があるという『自筆本』の注がついているからである。

旧あとのいかに降りけむ五月雨の 名にもある哉みのわ笠しま
第二に、『曾良旅日記』によると、この日五月四日(陽歴六月二十日)の天候は「折々日ノ光見ル」であり、仙台国分町に宿泊している。

しかるに通過したばかりの「岩沼宿」を「笠島は……」の句と同じ貼紙の上に間を置いて書き、あたかもこの宿場に戻つて宿泊したかのようにしてもいる。事実、岩波文庫の底本では「岩沼に宿る」とあり、後人を誤らせる記述を残したのである。

芭蕉がこのように推敲の過程で混乱したのは、西行が「枯野の薄」しか残らないと詠んだ所に、村起こしのためか社や塚ができていてと聞いて興を殺がれたか、何等かの必要で

先を急ぐ事なども、

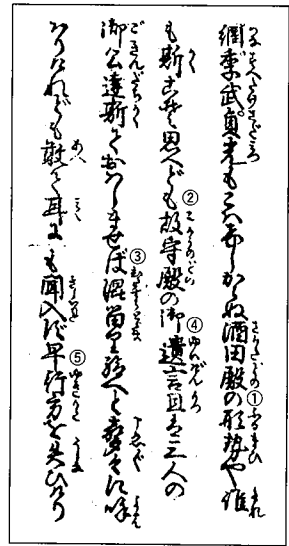
疲労に加わつて省略してしまつた実方塚訪問を後悔したためと考えられる。

いづれにしても実方塚部分は、『奥の細道』に謎を残している。

◆木版本『前太平記図会』の振仮名

写真版3は、享和三年(一八〇三)刊『前太平記図会』の「坂田公時失踪の場」の一部である。解読文を付けないので粗筋を書いてみよう。

源頼光が死して三月、墓参を続けた公時は、満参の日墓前で四天王仲間「望み足り、功成つたのでお暇する」と言つて去ろうとした。三人は「けしからぬ、故殿の遺言、三人の子息もおられる、止まり給へ」と呼び止めたが聞き入



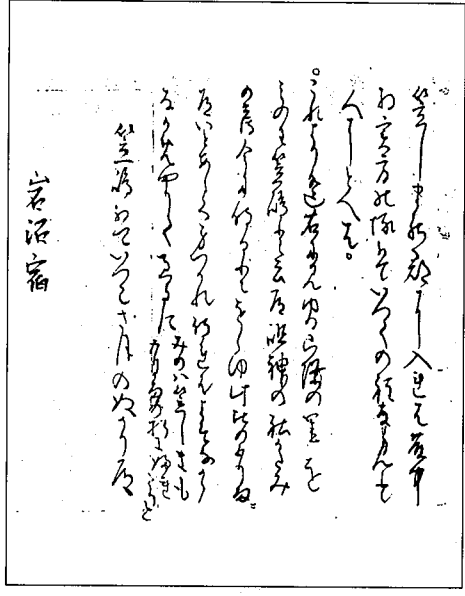
▲写真版3

れずに、行方をくらませた。さて、本稿のはじめに変体仮名解読力について述べたが、ここでは、漢字の読み方学習に木版本が有効なことを述べてみたい。私は解読文を仕上げる時、当時の読みに近い形で音読してみる。経験的にみて、語呂良く読めない場合は解読文に難点がある。ところが次の様な時に困る。

- ①形勢(ふるまい)
 - ②故守殿(こかうのどの)
 - ③混(ひたすら)
 - ④遺言(ゆいげん)
 - ⑤行方(ゆきかた)
- ①②③は、『くずし字用例辞典』にも『大漢和辞典』にも無い読みである。④⑤と合わせて、共に江戸期の読みとして「難語ノート」に書き留めている。

木版本には、漢字振仮名付き、変体仮名もののがかなりあるので、折に触れて読むことにし、所属する歴史のグループのテキストに利用したりもしている。

※『箱根之日記』は武田科学振興財団所蔵



山沼宿

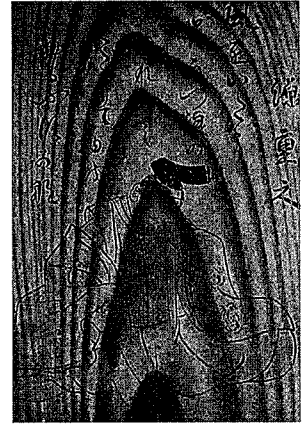
▲写真版2

▼解読文2

笠島(名取)に能郡耳入連者「藤中
将実方能塚盤いつくの程ならん。」と
人耳とへ者、
「これより遙右丹見ゆる、山際の里を
その王・笠嶋登云。道祖神の社、かたみ
の簿今丹待る。」登おしゆ。此比の五月雨二
道いとあし久、身つ可待連者、よそな可ら
な可免やりて過るに、みのハ、笠しまも
笠嶋盤 いつこさ月の ぬかり道
岩沼宿

歌人 源重之

日下部 庄一



(第一八二号再掲)

重之も多くの歌人と同じように生年不明。歿年は尊卑分脈に長保二年於奥州卒とあるから、これに一応従って年表を作製した。

生年は、祖父貞元親王が延喜九年909十月廿六日薨。伯父(養父)兼忠は天徳二年958七月一日卒。公卿補佐で58歳とわかる。したがって、兼忠は901年出生となる。弟である実父兼信は902年以後909年の間の出生であろう。二年後とみて、903出生と仮定し、約21歳頃に長子重之を出生とすれば、延長元年923Aとなろう。これによって、かりに年表を作製した。又、若くみるならば、祖父歿年909に父出生し、父25歳で重之の出生とみればB、10歳若くなる。又、父30歳で重之の出生とすればC、15歳若くなる。長保二年、78歳A、63歳Cで卒といえようか。ABC三の推定をあげておく。

爲清、致親、女子に作歌指道をし、晩年は陸奥に子を同伴し、共に寒地の苦勞を、歌を詠みあつて慰めあう。東遊西流、漂泊の歌人とよばれるにふさわしい。

地図で一目瞭然、日本国内を、当時これ程、巡遊吟行した歌人はいない。重之とその歌風については拙著『私家集論』一九八八年笠間書院刊行予定にゆずる。

次に

『前掲書』、目加田先生の『源重之集全記』解説「重之一門年表」の中から引用させていただきます。
源重之公の一千年忌に際しまして、心から御冥福を祈念申し上げます。やみません。
今後も源重之公の事跡に関心を持ち続けて行たいと思ひました。

重之一門年表(詠歌年次の推定出来るものは記入した。漢数字は重之集番号)

雀		朱		醍																			
		承平元		延喜元																			
4 3 2		8 7 6 5 4 3 2		22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2																			
934 933 932		931 930 929 928 927 926 925 924 923 922 921 920 919 918 917 916 915 914 913 912 911 910 909 908 907 906 905 904 903 902 901																					
				伯父兼忠出生																			
				祖父貞元親王×																			
				父兼信出生方																			
				重之出生																			
				カ																			
				A																			
				① 21兼信21歳頃ニ生レルカ																			
				②																			
				③																			
				④																			
				⑤																			
				⑥																			
				⑦																			
				⑧																			
				⑨																			
				⑩																			
				⑪																			
				⑫																			
				重之出生方																			
				B																			
				23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1																			
				① 25兼信25歳頃																			
				② 26																			
				平貞文×																			
				大江千古×																			
				善居逸×																			
				紀長谷雄																			
				古今和歌集○																			
				藤時平×																			
				菅家×																			
				菅原道真左遷																			
				三代実祿・延喜格○																			
				忠平撰政醍醐×																			
				敦康親王×																			
				宇多×																			
				定方×																			
				兼輔×																			

片岡日記

20

片岡永左衛門

大正十三年九月

一日 晴

午前十時 大蓮寺城原寺
仏前に読経回向。来客尾崎
亮司、高田ひろ、岡田小三
太、岡田寅吉、吉田義之、
石黒清次郎、関堅次、追々
打揃読経中に学友女生徒三
人來り焼香。別に学校ヨリ
教員代表シテ線香持參。来
客帰宅後十一時五十五分に
火花二発、一同慎黙。

まきれてハ忘れし物を
免くり来て また思わ
する九月一日

午後二時墓參すれバ、午
前二同級生の手向花ハ墓前
に堆し。

親一ハ帰京、よしハ帰宅
せしも、きよ、ひろ、次男
ハ泊にて今夜も大賑ひ、兩
人居たれば大喜びならむと
思へバ心も曇る。

市内にてハ今夜十二時に
大震とノ流言あり。不安を
抱しも少なからず毎々飛語
とハ困る。

二日 晴

八時半出勤三時半帰宅。
六時半にてきよ、ひろも帰
る。夜に入り、相中雜誌執
筆、今夜にて原稿完結。
今日地震、昨日なりせば
流言的中と迷しも有迎し。
今日にて幸ヒ。

三日 晴

本日午前又地震。

四日 曇

五日 晴

六日 晴

本店重役會出席

七日 晴

八日 晴

九日 晴

小田原支建築設斗參考に
行員ト共大磯支査員見学し
行キ、七時帰宅。

留守中 山崎武夫來訪。
面會セス残り惜し。

十日 晴

十一日 晴

地震 近来又々度々強震
有り。

十二日 晴

十三日 晴

三橋重役來談、午後上京。
親一方に止宿。

十四日 曇

午前中野馬越様に至り、
午後親一ト上野二展覽會ヲ
見る。

十五日 曇

俄二寒氣、一時新橋発に
て帰宅。

十六日 曇

今朝も寒く、袷羽織を着
す。今日又地震。

十七日

昨夕より暴風雨にて、午
前三時頃に止たるも、各地
出水意外ニ甚しく、早川、
酒匂、馬入、塔之澤も落橋
し午前中汽車も不通。電話
も一時不通となり、塔之澤
にて家屋も破損し、山崩に
て埋没せしも有り。被害も
意外ニ多く、今夜は電燈も
来らず。

十八日 晴

暑氣又八十六度となる。
午前後二回地震。

熱海露木お政様久々にて

來訪。震災以來入浴も少、
同家ハ熱海にて繁昌の浴舎
なるも、一、二月頃ハ列車
なりせば七、八十人の客な
るに、十人位にて道路の完
成迄ハ回復も不可能ト申事
なり。

十九日 雨又晴

昨夜又地震。一昨夜の風
雨と昨今度々の地震にて
人々一層不安を感じ其為
か、今日ハ銀行も特に閑散。
夜に入り、龍夫來る。

二十日 晴

本店二行、三時帰宅。

二十一日 午後雨

願修寺虎葉師如來研究に
先住一色吞海寺に行く。午
後岡田負傷見舞に行く。

二十二日 晴

昨夜ハ殊ニ寒かりしに今
朝より又秋暑。相中雜誌増
補完成。序文を書し仮綴も
なし、全く脱稿して重荷を
下したるも、そより浄書ハ
いつ出きるか当分ハ六ヶ敷
し。

二十三日 晴

龍夫午後 帰京。

昨日、生木大黒天除幕式
ありしと聞く。是ハ大久保

家家老吉野氏邸を明治二十

(年)頃、辻村真助買受其
後十年も経て隣家加藤氏買
取しに鉄道開通にて辻村家
現在地ハ停車場に売却とな
り、此吉野加藤の旧邸に移
転せしにホテル設置ノ計画
なす者有り。其敷地ニ売却
し、辻村ハ荻窪ニ移住とな
りしニホテル敷地ニハ隣接
ノ御料局にてハ、最初ハ許
可せざりしも、御料地も私
下を希望セシニ御料局出張
所ノ設立ノ敷地不用ヨリホ
テル敷地ノ一部ト交換の交
渉成り、御料地ノ一部ヲ交
附セラレシ二十二年地震に
て、ホテルも画餅トナシニ、
如何ナル動氣よりカ瀬戸鶴
吉ト云者拂下ノ敷地ニ有り
し樟大木ノ生木ニ大黒天ヲ
生木ノ俣ニ彫刻し安置スル
事ヲ発起し森百造氏本年ノ
五月頃ヨリ着手し、此程出
来セリト云うも未タ參詣セ
す。

二十六日 晴

親一大坂よりの帰途立寄
り、墓參し午後帰京す。

二十七日 曇

病欠

二十八日 晴

十時吉田義一周忌佛二

行。帰途蓮上院ニ墓参し同寺ニ在た松原神社ノ本地佛ト云西光院ノ十一面觀世音開帳す。古佛ニて鎌倉時代ノ強キ刀法モ見ユルモ其以前ナルヘキカ。

二十九日 風雨

病欠
相中雜誌一冊淳子ノ書寫出来徳富先生ニ郵送又何と批評するか。

三十日 雨

借地借家料値下問題ハ先月頃より始メ、二三回町民大會も開て喋て居るも、当地相当ノ人物ニ非ず京浜等の此種の職業人物ニて昨日中田氏の談話ニよると同氏ニハ多少費用の出金ヲ懇請して謝絶されしとの事、警察ニ大會の届出ニ行し者ハ苦なから何かせされハ食するニ困ると云タトノ事、困たものなり。人の必用ニ附込高価ニ貸けるも有りてか、る事も有る後から後から困る事が出来る。

大正十三年十月

一日 雨

二日 晴

曾我ニ行曾我城跡と祐信家敷跡を見て、帰りハ鴨宮迄徒歩

三日 晴

四日 午後より雨

五日 雨

午後尾崎よし来り 夕方帰る。岡田医師も来訪。

六日 雨

本店ニ行

七日 雨

不快ニて午後帰宅

八日 大雨

午後岡田氏 診察ニ行秋冷降雨ニて米価追々騰貴、昨日肥料商来る。大豆粕ハ支那戦争にて特に高く壹枚式円八十銭なり。しからば例の通り引く肥料より割安す

九日 雨

十日 曇

午後より上京 親一方ニ止宿。途中にて

そばの花白き夕辺の秋風に声ふり立てて鈴虫のなく

虫のなく音にや心のひかるらむ 野川の岸に人のたたすむ

ひと筋二たる、野川の釣の糸 なく虫の音も知らずかほする

近來俗用ニて歌も出来ざりし二車中にて

十一日 曇
十一時帰る。直に出勤三時ニ退出せしニ三橋重役来行ニて再度出勤五時帰る。昨日赤羽心光院戸松学英師留守中来訪兼て頼みタル増上寺信教僧正ノ染筆三枚持参

十二日 晴
午前尾崎ニ行 午後在宅

十三日 晴

加奈子学校修学旅行ニて当地ヲ徑テ芦之湯泊りニて箱根越え爲メ来る。淳子ハ下女ト停車場ニ迎ふ。

十四日 晴

淳子午後より上京

十五日 半雨

十六日 半雨

十七日 晴

午後酒匂千貫橋七夕社ニ行キ鴨宮を廻り三時帰宅

十八日 晴

十九日 晴

宮内省金庫事務是迄大磯支店にて取扱之処同省林野ヲキ小田原ニ移転ノ為メ出納事務当店テ取扱為メ諸事打合之為メ出張。帰宅セシに田辺輝実氏病死之報ニ接し帰宅後同家ニ行。

廿日 雨

高田安兵衛塔之沢より帰途一泊

廿一日 雨

午後田辺氏ニ行

廿二日 雨

廿三日 雨
午後田辺氏ニ行

廿四日 晴

午後三時田辺氏告別し火葬所ニ送り五時帰宅。

廿五日 晴

廿六日
行用にて大磯支店ニ長崎氏ニ面会

廿七日 晴

十二時發にて本店ニ至り四時帰宅、夜に入り田辺氏に至り十二時帰宅

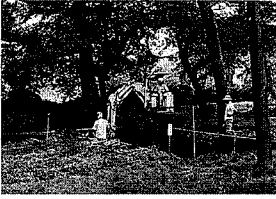
廿八日 半雨
午前七時田辺氏遺骨停車場に送る。本日東京にて告別後護国寺ニ埋葬ノ筈。

午後福浦露木老人十三回忌仏事にて淳子と行く。根府川にて下車、鉄道末夕完成セス。徒歩連絡の為白糸川ノ震災跡ヲ徒歩。幸に小雨となる。途中テ入々にて、三浦梧楼子ニ面会挨拶セシニヨク覺て居タト大快ひ又乗車す。此車室ハ震災之當時トンネル中ニテ被害免レタルニテ此室有サレハ此ノ徒歩連絡もナシ得サルト幸ノ事ナリシし真鶴ニて下車すレハ道路特ニ悪し。

すへらしと足ふみしむる雨の道、杖をちからと頼むハかなさ

關東大地震より一年間は、表題を「地震日記」としてきました。これからは元の「片岡日記」に戻り、解説は、岡部忠夫氏から勝俣淳一郎氏に変わります。(つづく)

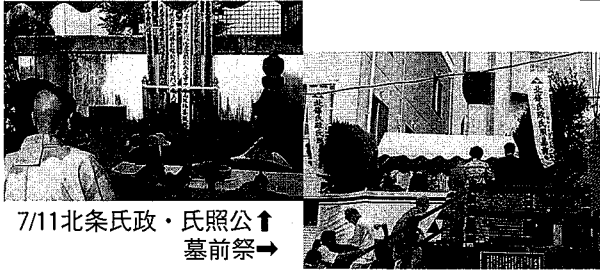
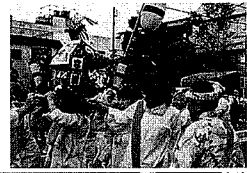
街 さ ま ざ ま



←小田原城跡試掘調査↑

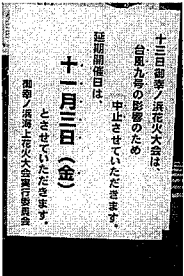


↑7/29~30 →
小田原ちょう
ちん夏祭り



7/11北条氏政・氏照↑
墓前祭→

→8/6
港まつり



またまた延期



明暗二題

←栄町にて



←板橋にて

神奈川県17区衆議院小選挙区選出議員選挙

当 140,236	河野 洋平	自民前
85,227	ツルネンマルティ	民主新
23,019	鈴木新三郎	共産新

衆議院小選挙区選出議員選挙
ポスター掲示場
(特別区第17区選挙区)

注意
1. このポスター掲示場は、衆議院小選挙区選出議員選挙の候補者及びその名前を掲示する場である。
2. ポスターは、立候補の届出の順序と同一の順序の区画に貼付することになる。
3. この掲示場をこわしたり、汚れたり、貼付したポスターを剥がしたりすると、法律により処罰される。(罰金 3万円)

小田原市選挙管理委員会

投票日 6月25日
投票時間 午前7時～午後8時まで



←栄町にて



←ポケットティッシュ配布



小田原駅前にて



小田原駅前にて

訃報

角田修次氏(賛助会員
角田ガクブチ店社長小田
原市栄町二一十六一十
五)
去る六月十二日逝去さ
れました。
享年六十八歳

北条龍彦氏(元・小田原
市立病院院長 小田原市久
野四三四一九)
去る六月十八日に逝去さ
れました。
享年八十三歳

ご冥福をお祈り致しま
す。



◇安思我良

No.4 平成12年5月

A4 40ページ

編集 南足柄歴史同好会

編集委員会

発行 南足柄歴史同好会

代表者 南足柄歴史同好会

会長 内田 清

南足柄市弘西寺三交

〒416-0155

・南足柄・小田原の築城石

の謎を追う 内田 清

・小田原藩領下の民間宗教

家たち 高橋 佐年

・南足柄の唯念名号塔

小澤 勇一

・郷土の俳人 石川 梅僊

杉田美代子

西田 堪

・最乗寺参道の葉と岩下金

郎の葉包紙 小澤 勇一

内田清氏の「南足柄・小

田原の築城石の謎を追う」

は初見であり、貴重な史料

となっている。従来、築城石

は伊豆半島東岸から真鶴片

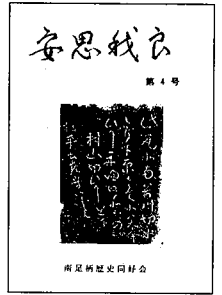
浦早川までの地域に出た石

材が考えられていたが小田

原市久野、南足柄市塚原に

も石丁場が新たに見出さ

れ、加藤肥後守の銘文や「三



安思我良

つ葉柏(松平土佐守に關連

あり)の刻印が記されてい

た。このことに関連して、

次のことが今後の課題であ

ると、内田氏は提言してい

る。

①石丁場が何時頃のもので

あるか。

時代が判明することに

よって、江戸城築城に

関連があるかどうか。

②伊豆・東京での刻印石の

発見のための調査。

③久野、塚原などの地での

刻銘・刻印石の発見のため

の調査。

④加藤清正、池田輝政まで

を視点に入れた幅広い史料

研究など。

◇沼津史談

No.51 平成12年5月

A5 74ページ

編集・発行 沼津史談会

沼津千本首塚の論考

鈴木尚東大名誉教授

益田 實

歌人と謝野晶子と伊豆讃

歌―三津と一碧湖―

池田 幸枝

コラム 梶原北条早雲

益田 實

楨不言舎と俳句

城 直樹

江浦に伝わる海難文書②

足立 実

続・大峯山 医源寺の開

基について 石井 種生

原宿俳人 還亭去留と松

谷庵麗々 望月 宏充

大器晩成の武将・早雲

村社 恭児

笹見窪・混同農社につい

て―笹見窪・徳川家幕

臣移住の地―高田 篤三

渡瀬寅次郎とグルントビ

佐野 利夫

コラム 重寺の三番叟師

匠の墓を発見

石井 種生

史跡見学会(平成11年度)

コラム 山頭火と沼津の

山田梅軒 関口 昌男



◇歌集 蹈火



B5 三函ページ

定価 二八〇円

著者 鈴木 貫介

発行者 片桐 努

制作・発行所 夢工房

〒二五七-〇〇六

秦野東田原三〇〇兜

〒416-0155

著者の歌集は、今回で九

冊目。昭和六十三年、平成

元年より十一年の十二年間に

詠んだ四九四首を収める。

戦時中、小田原に疎開中

の三好達治に師事した著者

は三好から与えられた訓戒

を心の支えとし、如何なる

結社にも所属せず、ただ一

人こつこつと精進を重ねて

きた。それだけに歌に独自

性を展開する。

本書は伊勢治書店、八小

堂書店、平井書店で販売さ

れている。



◇歌集 蹈火

大磯方面史跡巡り

【日時】

六月八日(木) 晴

大磯駅前九時集合

【講師】大磯ガイドボラン

ティア外川敏子氏

【コース】鴨立庵―照ヶ崎



澤田美喜記念館にて

海岸・松本順謝恩碑―島崎

藤村の墓(地福寺)―新島襄

終焉の地―虎御石(延台寺)

―澤田美喜記念館―神明町

公園(昼飯)―大磯駅―善福

寺前バス停―善福寺―(国

重文木造伝良源座像、県重文

木造、阿弥陀如来立像)・竜頭

横穴墓―慶覚院(県重文木造

地藏菩薩座像)―高来神社―

善福寺前バス停―大磯駅前

解散四時。

【参加費】五〇〇円 弁当

各自携行

【参加者】山口一夫、勝俣

淳一郎、内田雅廣、内田幸

雄、内田美枝子、蛭間節子、

本多孝三、曾我保夫、吉池

清、早野廣司、尊子、杉山

真登、田中静雄、木曾正雄、

名和稔雄、高橋佐年、門松

雅夫、山本博子、寺田正、

額田良男、和田治助、柏木

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店

小田原銀座 アオキ画廊

熱海 アオキクリニック

飛多屋屏

紳士服のアメリカヤ

(株)アルファ

伝統工芸 石川漆器(株)

税理士 石原和夫事務所

伊勢治書店

伊豆箱根トラベル 小田原営業所

画材 ガクブチ ヲウエ

自動車修理 板金塗装 I-マン

かまぼこ

株式会社 小田原魚市場

小田原ガス

小田原報徳自動車

オートセンター・スキヤマ

オリオン座

かまぼこ籠 清

鐘紡株式会社小田原工場

神尾食品工業

木地挽 日下部産業

かみやま小児科クリニック

興電社

小伊勢屋

国府津館

(有)小松石材店

さがみ信用金庫

趣味のこぶく さくらい

正栄堂

箱根湯本温泉 春光荘

後のお宿

小田原 小田原 小田原

辰寿堂スポーツ

大宮不動産

小田原城趾前田毎

おる後

二宮

茶半家具株式会社

ちんまう本店

土谷建設株式会社

角田ガクフ子店

東京電力(株)小田原営業所

株式会社 東華軒

トーホー建物齧

鳥かつ樓

和菓子菜の花

八小堂書店

八子マサ

平井書店

株式会社 報徳

建築金物(株)星崎仲吉商店

家庭金物 本多時計店

松坂屋

学生専科 マルク

諸星運輸グループ

株式会社 美濃屋吉兵衛商店

曾我の権干 美の政

みみづく幼稚園

ヤオマサ株式会社

錦通り 山口菓子舗

防災器具 優光社



幸子、鈴木孝、渡辺松太郎、向山重忠、桑原俊男、田中ヒサエ、相原俊夫、藪すみ子、青木良一、豊住喜與寿、剣持公一、和子、石井啓文、落合清、伏見弘、萩原とり子、杉本剛気、遠藤定雄、遠藤正治、岡部忠夫。以上四十一名(敬称略順不同)

小田原史談会史跡巡り

芭蕉のふるさと 伊賀上野への旅ご案内

平成12年9月21日(木) 午前7時小田原駅出発 10月9日(木)~10日(金)

日程 2000.11.月

- 9日(木)小田原駅前7時出発 松坂城跡 本居宣長旧宅 三井家発祥地 伊勢皇太神宮 おかげ横町ほか
10日(金) 宿 8時出発 上野城址 芭蕉記念館 俳聖殿 忍者屋敷 崇廣堂 鍵屋の辻ほか

宿 鳥羽 ビューホテル花真珠 0599(25)2111

費用 27,000円 受付 11月2日(木)午前9時 伊豆箱根トラベル小田原営業所 会費をご用意下さい 皆様のご参加をお待ちしています

次回 初詣の旅

期日 平成13年1月18日(木) 午前7時小田原駅出発
日程 熱田神宮 徳川美術館
会費 7,600円
受付 1月11日(木)午前9時 伊豆箱根トラベル小田原営業所

小田原史談(年四回発行)

年会費 普通会員三千円 〇〇三〇二六四三六